宮城学院資料室年報

MIYAGI GAKUIN ARCHIVES OF HISTORY REVIEW

信　望　愛

2018年度

第24号

宮城学院資料室

もくじ

□巻頭言　　宮城学院学院長　嶋田 順好 …… 3

□大学開設70周年記念事業プレ企画　公開シンポジウム

「東北における女子ミッション教育の社会史」

◆シンポジウムに寄せて

宮城学院女子大学　一般教育部教授　天童　睦子…… 5

◆講演「ミッション系女学校の教養文化」

京都大学大学院教授　稲垣　恭子…… 9

◆インタビュー「宮城学院　卒業生に聞く　第１回」

宮城学院同窓会第15代会長　岩井　陽子…… 23

□論考…… 28

「宣教師たちの夏休み

～宮城学院宣教師たちの軽井沢における別荘所有の変遷～」

宮城学院女子大学　現代ビジネス学部教授　宮原　育子

□小論…… 51

「宮城女学校第１回卒業生特定について」

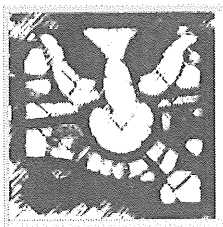
宮城学院資料室　佐藤　亜紀

□彙報…… 54

2018（平成30）年度彙報

宮城学院資料室

〔表紙〕宮城学院礼拝堂のステンドグラス　「降誕」
ガブリエル・ロワール(1980)



巻頭言

宮城学院学院長　嶋田　順好

ここに『資料室年報第24号』を発行することができますことを主なる神に感謝するとともに、執筆、編集にご尽力いただいた方々に衷心より御礼を申し上げます。

宮城学院女子大学は2019年に創立70周年を迎えます。そのプレ企画として2018年11月24日に一般教育部の天童睦子教授が、「女子ミッション教育史研究会」代表の片瀬一男東北学院大学教授と共に企画されたシンポジウム、「東北における女子ミッション教育の社会史」が開催されました。そこでこの学問領域の第一人者であられる稲垣恭子京都大学大学院教授により「ミッション系女学校の教養文化」と題して主題講演がなされました。その内容を本号に収めることができたことは望外の喜びです。

宗教社会学の代表的著作と言えばマックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』が真っ先に脳裏に浮かんできます。ヴェーバーの分析は、近代ヨーロッパの企業経営者や上層の熟練労働者層には、カトリックよりプロテスタントが多いという統計的気づきから始められています。そこから彼は、近代資本主義社会の根底にある経済的合理主義とプロテスタンティズムとの間には何らかの関係性、親和性があるのではないか、との仮説を立て、見事に検証していきました。

今回の場合は、宗教社会学というよりは文化社会学の領域と言えるのでしょうが、近代日本における女子ミッションが果たした役割を、ミッションで学んだ者と公立女学校で学んだ者たちとの広範な統計調査に基づく比較分析によって抽出し、独自の「教養文化」の形成という視点から平明に説得力をもって提示していただけたことはまことに意義深いことでした。

稲垣教授の客観的な分析とは正反対の方向から、つまり宮城学院で学んだ同窓生の一人として、その教育の恵みと貴さについて証言してくださった岩井陽子元同窓会長からの聞き取り、並びに天童教授の「シンポジウムに寄せて」という解題も本号に収めてありますので、併せてお読みいただければ幸いです。

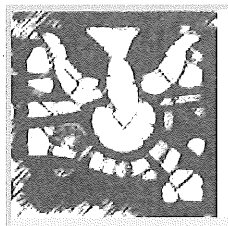
なお、シンポジウムでは片瀬教授も「集合的記憶の文化社会学－宮城学院創立記念誌『期にいたりて実を結び』の内容分析」と題する報告をしてくださいました。計量社会学的手法を駆使した見事な分析の結果は、本学附属キリスト教文化研究所『年報』第52号（2019年3月刊行）に収められることになっております。関心のある方はぜひそちらの方にも目を通していただければと願うものです。

上記以外に本号では現代ビジネス学部宮原育子教授が寄稿してくださった「宣教師たちの夏休み～宮城学院宣教師たちの軽井沢における別荘所有の変遷～」という論文も収めることができました。観光学がご専門の宮原教授は、ハンセン・リンゼイ両宣教師が宮城学院に寄贈してくださった軽井沢の別荘地を手掛かりに、日本で最も高名な避暑地の開拓と発展に意図せざる結果として貢献した多くの宣教師たちの足跡を、別荘とその変遷の調査としてまとめてくださいました。かつてこの別荘でリトリートの時をもった多くの同窓生の皆様にとっては、懐かしい様々な思い出が走馬灯のようによみがえってくる貴重な論考となるにちがいありません。

この論文のなかで1937年にニコデマス宣教師の別荘を川端康成が入手し、その年の12月にこの別荘を借りて堀辰雄が『風立ちぬ』の最終章「死のかげの谷」を書いたことが報告されています。私事で恐縮ですが、『風立ちぬ』を愛読してきた者としては、機会が許されれば一度は同じ季節にこの地を訪れてみたいと思わずにはいられませんでした。

今号では期せずして文化社会学、観光学というこれまでの年報で一度も取り上げられなかったであろう学問的関心から宮城学院にアプローチする論文が掲載されることになりました。その結果、多くの新しい知見を得られたことは、まことに意義深いことと存じます。貴重な講演、論文、証言をお寄せくださった皆様に改めて心より御礼を申し上げます。

なお、今年度から資料室職員として『年報』の編集の労をとってくださった佐藤亜紀氏が、宮城女学校の最初の卒業生4名の写真と名前を、詳しい調査の末特定してくださいました。その結果をまとめた小論も掲載することができましたことも喜び感謝せずにはいられません。



「東北における女子ミッション教育の社会史」シンポジウムに寄せて

宮城学院女子大学 一般教育部教授　天童　睦子

はじめに

2019 年、宮城学院女子大学は大学開学（1949 年）から 70 周年の節目を迎えた。その前年の 2018 年 11 月 24 日、70 周年記念事業プレ企画として、公開シンポジウム「東北における女子ミッション教育の社会史」が開催された（主催：宮城学院女子大学、共催：本学附属キリスト教文化研究所、女子ミッション教育史研究会、後援：宮城学院同窓会）。

本シンポジウムの契機は、「女子ミッション教育史研究会」代表の片瀬一男先生（東北学院大学教授）の発案に遡る。私（天童）が本学に女性学担当教員として赴任した 2015 年、社会学分野のある学会の理事会でお目にかかる機会のあった片瀬先生が、女子教育、とりわけ宮城学院の歴史に関心をお持ちで、すでに『天にみ栄え』をはじめ本学の史料にもあたっておられることを知った。片瀬先生を中心にさっそく研究会を立ち上げ、2017 年度には研究助成（科研費）を得て、本格的に「ミッション系女子教育の戦後史」研究に着手した。私たちの研究会は、社会学分野の研究者によって構成されており[(1)]、キリスト教主義やその伝来の歴史には必ずしも詳しくはない。むしろ、社会の構造的変化や女性の教育史を辿りながら、ミッション系女子教育の独自性、可能性を見極めていきたいと考えている。宮城学院同窓会はじめ多くの皆様にご協力をいただきながら、史料収集、卒業生へのインタビューを重ねており、本シンポジウムは、その中間報告と位置付けられる。

ミッション系女子教育の展開

歴史を遡れば、19 世紀半ば、徳川幕府が欧米諸国と通商条約を締結すると、1859（安政 6）年 5 月米国聖公会のリギンズ（J.Liggins）らの来日を皮切りに、同年 6 月に同派のウィリアムズ（C.M.Williams）が長崎に、同年 10 月には米国長老教会のヘボン（J.C. Hepburn）、同年 11 月には米国オランダ改革派のブラウン（S.R.Brown）らが神奈川に渡来したのを先頭に、各派の宣教師が来日する[(2)]。やがて、アメリカン・ボード、メソジスト各派、バプテスト各派など、さまざまな流れを汲むミッション・ボードによって多数のミッションスクールが創設された[(3)]。

1870（明治 3）年、ヘボン施療所で女子教育がキダー（Mary Kidder）によって始められ（のちのフェリス女学院）、同年築地居留地ではカラゾルス夫妻（C. Carrothers、J. Carrothers）によって A 六番女学校（のちの女子学院）、1874 年にはスクーンメーカー（D. E. Schoonmaker）によって麻布に女子小学校（のちの青山学院）、1875 年には神戸でタル

カット（E. Talcott）とダッドレー（J. Dudley）によって「女学校」（通称「神戸ホーム」、のちの神戸女学院）、1879年長崎に活水女学校（活水学院）、1880年には、ブリテン女学校（横浜英和女学院）の開学と、相次ぐミッション系女子教育の展開があった[4]。

東北についていえば、1886（明治19）年5月　押川方義とW.E.ホーイが仙台神学校（のちの東北学院）を創設、同年（1886年）9月に、本学の前身、宮城女学校が創設された。ほぼ同時期に弘前では、本多庸一が弘前教会内に遺愛女学校の分校を開設（1886年）、来徳女学校と称し、1889（明治22）年に弘前女学校が設立された（のちの弘前学院）。また仙台では、1892（明治25）年、米バプテスト派婦人外国伝道協会から派遣された女性宣教師により「尚綱女学会」として創設され、のちに尚絅女学院（2003年～尚絅学院）となった。

カトリック系では、1892年、シャルトル聖パウロ修道女会の修道院をもとに1893（明治24）年、私立仙台女学校が開校された（1948年～仙台白百合学園）[5]。

キリスト教と女性の教育

キリスト教が日本の女子教育に果たした影響は大きい。この点について隅谷三喜男は、「封建日本において人間関係は対等者間の人格的関係として把えられず、常に上下の支配従属関係として、しかも地縁、血縁等の自然的関係を媒介として成立していた」とし、それゆえ「キリスト教は当初著しく倫理的、社会倫理的な革命思想として受け入れられた」という。さらに、当時、女子に学問は必要ないと考えられていた日本社会で、宣教師らは明治期初めから、伝道の手段として、また「女子の驚くほど低い社会的地位を多少とも引き上げるため」、女学校を各地に設立した。すなわち、女性の社会的地位が低く留め置かれていた時代に、キリスト教主義に基づく女子教育は、女性の権利の主張、女性の解放運動につながるものとの見方もできる[6]。

本学の前身、宮城女学校の初代校長は合衆国改革派（ジャーマン・リフォームド）教会から派遣されたエリザベス・R・プールボー宣教師。弱冠31歳の彼女は、外国伝道局に宛てた書簡のなかで、教育の目的について「知性と品位 wisdom and virtue を備えた女性を養成すること」と記している[7]。

時を経て21世紀、本学は、社会のニーズを見据えつつ、女性のための学びを通して、自立した「個の育成」を目指した教育を実践してきた。2015年以降は、大学のカリキュラム改革を経て、女性学の導入、キャリア教育の充実など、リーダーシップと協調性を兼ね備えた総合的実践力をもつ女性の育成が進められている。女性の教育において先駆的役割を果たしてきた本学が、現代における人間らしい生き方や教養教育の意味を問い、女性の自立と主体的学びを創造する意義は大きい。

シンポジウムについて

2018年11月24日、公開シンポジウム「東北における女子ミッション教育の社会史」は、平川新学長の挨拶、天童の趣旨説明に続き、音楽科の学生によるAve Mariaの独唱[8]で幕を開けた。

本シンポジウムでご講演いただいた稲垣恭子先生（京都大学大学院教授）は、『女学校と女学生－教養・たしなみ・モダン文化』（2007）など、歴史社会学、文化社会学で著名な研究者である。企画者（片瀬・天童）とは学会活動等を通して旧知の間柄であり、職務上極めて多忙でおられることを知りつつも、本課題で真っ先にお呼びしたい方との思いで依頼し、快く講演をお引き受けいただいた。

ご講演では「ミッション系女学校の教養文化」と題して、文化社会学の視点から、明治期の「女学生」の誕生、ミッションスクールと女学生文化を概説し、関西地域での実証的調査を踏まえて、「たしなみ」の文化、「モダンな教養文化」の接点としての女学生の教養文化について話された。さらに、現代に生きる教養として、専門知識や実用的知識のみの偏重ではなく、分野を超えた知的好奇心、批判的・総合的な知、コミュニケーション力といった、ポスト近代の教養が不可欠な時代にあることに言及された。講演のまとめは、本誌（『宮城学院資料室年報』）に掲載されている。

後半の研究報告では、片瀬一男先生が「集合的記憶の文化社会学－宮城学院創立記念誌『期にいたりて実を結び』の内容分析」と題する報告を行った。計量社会学の手法により、本学院の卒業生による記念誌の内容分析から、西欧的・キリスト教的文化から日本的・家族的女性文化へ、さらに国際的・専門職的スキルへの注目と、学校文化の史的変遷を鮮やかに描き出した。報告内容の一部は、論文として、本学附属キリスト教文化研究所『年報』第52号（2019年3月刊行）に収められている。

シンポジウムでは最後に、宮城学院の歴代の卒業生に発言いただいた。一組目は、岩井陽子さん（家政科5回卒 宮城学院同窓会第15代会長）、お嬢さんの佐藤美千代さん（教養科20回卒）、さらにそのお嬢さんの佐藤文香さん（陽子さんの孫、宮城学院中・高卒業生、ICU 2016年卒）の三世代で、陽子さんのお母様も本学の出身とのことで、当日は写真を胸に、そろって壇上に上がられた。

2組目は明城（あかぎ）千枝さん（音楽科 1978年卒）。長年、ピアノ講師をされながら、里親の活動を続けられ、社会活動や日常の子どもとのかかわりのなかで感じる思いを率直に話された。卒業生による、学生時代の思い出、卒業後の諸活動の発言からは、学院で培った精神性や学びがさまざまに活かされていることが伝わった。

学生、一般市民、同窓生など300名近い参加者があり、学生からは、講演を聞いて「自分らしさ、その人らしさを内側から支えることが教養」、「自分の通っている学校について知らないことが多かった。知ってよかった」、「卒業生の話をうかがって、誇りをもって生きていきたいと感じた」といったコメントが寄せられた。本誌を通じて、本シンポジウム

に参加、協力いただいた皆様に心より感謝申し上げる。

教育とは文化の伝達であり、命のバトンをつなぐ営みといえる。本学での学びが契機となって、「女性と教育」の歴史を知り、人間らしく生きることの意味を考え、未来を紡ぐ歩みを着実に進めていく一助となれば幸いである。

〔注〕

(1) 本シンポジウム共催・企画は「女子ミッション教育史研究会」による。研究メンバーは次の通り。研究代表　片瀬 一男（東北学院大学教授）、遠藤 恵子（東北学院大学名誉教授，前山形県立米沢女子短期大学学長）、天童睦子（宮城学院女子大学教授）、相澤　出（医療法人社団爽秋会岡部医院研究所 主任研究員，社会学者）。また、本シンポジウムに先立って、2017年7月29日に本学キリスト教文化研究所・公開研究会「ミッション系女子教育の歴史と展望」を開催し、多くの示唆を得た（企画 天童睦子）。報告者：大迫章史「キリスト教主義教育の近代－宮城女学校を事例に」、新免貢「未来を切り開く「知恵」子たち－キリスト教教育を問い直す」。

(2) 隅谷三喜男『近代日本の形成とキリスト教』新教新書 1961，p.7.

(3)『天にみ栄え — 宮城学院の百年』発行者 早坂禮吾，宮城学院，1987，『宮城学院 目で見る 120 年』宮城学院，2006．アメリカン・ボードの伝道の経緯については本学学院長嶋田順好先生より貴重な示唆をいただいた。

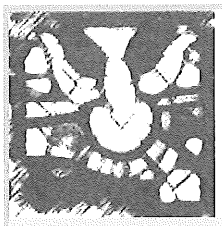
(4) キリスト教学校教育同盟百年史編纂委員会編『キリスト教学校教育同盟百年史　年表』教文館，2010.

(5) 沿革は各校の HP による。

(6) 隅谷三喜男『前掲書』1961，pp.104 － 6.

(7)『E・R・プールボー書簡集』監修 出村彰，翻訳 飯塚久栄及び MG 会，発行人 深谷松男，宮城学院，2007，p.21，『同』（英文資料）編纂 渡邉弘道，宮城学院，1996，pp.14 － 15.

(8) 本学音楽科学生の協力による。歌唱 遠藤萌香，伴奏 庄子三未。



□講演

「ミッション系女学校の教養文化」

稲垣　恭子（京都大学大学院教授）

宮城学院女子大学主催 公開シンポジウム「東北における女子ミッション教育の社会史」
2018年11月24日（土）宮城学院女子大学 C202大講義室

ミッション系女学校の魅力

ご紹介いただきました稲垣です。宮城学院女子大学は開設70周年を迎えられるとのこと、お祝い申し上げます。前身の宮城女学校の開学からですと、ほぼ130年という大変歴史のある大学で、「ミッション系女学校の教養文化」というテーマでお話させていただくことは私にとっても光栄で、うれしく思います。実は私の勤めております京都大学教育学部も、2019年で70周年となりますが、我々はまだ寄付金集めに四苦八苦しているような状況で、大変うらやましく思います。

一方で、今日このような形で話をさせていただくのは大変緊張する思いです。と言いますのは、皆さんの多くはまさに、ミッション系の大学で学んでおられる、または卒業された方々だと思います。私自身は、小学校から大学まで普通の公立・国立の学校でずっと過ごしてきまして、実体験という意味では、ミッション系の体験は個人的にはないわけです。ただ、私の母が、今90歳になっているのですけども、ミッション女学校という存在にずっと憧れを抱いておりました。母は公立の女学校出身なんですけれども、娘の私にはそういうミッション系の女子大学に行ってもらいたいという希望をずっと持っていたようですが、結局無かったということになりました。

私事ですが、少しお話させていただきますと、母は太平洋戦争の終わりに女学生という時期でございましたので、女学生らしい経験というのは少なかった世代です。その分だけ少し前の女学校とか女学生という存在に憧れていました。特にミッション系の女学校は英語が堪能だったり、西洋音楽、今日は先ほど素晴らしい「アヴェ・マリア」を聴かせていただき、講演前に礼拝堂にも行きましてステンドグラスも拝見いたしましたが、そういう雰囲気に憧れていたと思うのですね。そういう文学や音楽の教養が身につけられるというイメージがあって、文学好きの母には魅力だったと思います。母はその学問への憧れ、音楽への憧れというものが大きく、今でもあらゆるジャンルの本を読んだり、研究会にも出かけたりして元気に過ごしておりますが、若い頃になにか満たされない思いがずっとあったのではないかと思うのです。ですから、なにかすぐに役に立つ知識というわけではないものの、ずっと生きる力になっていくもの、それが広い意味での教養であろうと私は思っています。

一般に教養というと、なにか非常に難しい哲学や思想の本を読んでいるとか、あるいは今ですと、クイズ番組になんでも答えられるという、博学・博識のようなイメージもあった。

むしろ、教養というのは、自分をそれで大きく見せるというものではなくて、その人らしさとか、生き方のスタイルという、内側から支えていくものであろうと思います。今日はそういう観点を踏まえまして、女学校、特にミッション女学校の中で作られた、そして今日まで継承されてきた文化とはどのようなものなのか、そしてそれが現在の私たちの生き方にどのようなヒントを与えてくれるのかについて、これまで思ってきましたことを率直にお話しさせていただきたいと思います。

明治期の女学校の誕生

早速ですが、まず女学生という存在が初めて誕生する明治の初めの頃に戻って当時の女学生の様子について紹介させていただければと思います。明治になるまでは、日本の女子は家で家事・見習いをするという形か、あるいは奉公に出るというのが一般的でしたので、勉強といっても寺子屋とか自宅で学ぶのが当たり前だったんですね。これが明治になりましてから、学校に通って学問をするという女性が現れる。それが女学生の誕生ということになります。

といいましても、当時はまだ女子が学校に通って勉強するというのは極めて珍しいことで、新しい社会現象という意味があって注目の的でした。たとえば、ある地方では、私が調査した滋賀県の長浜というところなんですけれども、そこでは女学生をほとんど見たことなかったので、近所に女学校に行く生徒が現れたということを聞いて、朝登校する際にわざわざ窓を開けてどんな風に登校するのか、どんなお嬢さんなのか覗いて見ていたという話があるくらい、非常に珍しい存在だったのです。小学校卒業後、中等教育機関として女学校が正当化されるのは明治の 32（1899）年です。やがて高等女学校令という法律が出来て、カリュキラムも正当化されていくわけですが、その当時、ごく初期から女子教育の場として成立したのが、キリスト教系の女学校、いわゆるミッション女学校です。初期には、北は函館から、こちらの仙台、それから東京ですと築地、さらに横浜、神戸、長崎と主に開港地にキリスト教系の女学校が作られていくことになります。関東のフェリス和英女学校、関西ですと神戸女学院、そして宮城女学校は先ほどご紹介ありましたように明治 19 年という非常に早い時期に創設されています。その多くは、アメリカンボード等の外国ミッション[1]が経営するというものでしたので、授業も学校生活も食事も全部外国式だと聞いています。授業も全部英語で行われているので、英語がよくできたのだと思います。プロテスタント系の学校だけでなく、キリスト教主義の女学校を全部ひっくる

[1] 宮城女学校の教育は、合衆国改革派教会（ジャーマンリフォームド）派遣宣教師により担われた。

めてミッション女学校という風に当時は呼んでいたと思います。

当時、女学校に通うことが出来たのは、一部の女性に限られていました。主には華族階級、これはもともと少なく、あとは士族層、武士の家庭の出身者というのがミッションスクールでも多かったということになります。

東北出身の「ハンサムウーマン」

数年前に、NHK 大河ドラマで「八重の桜」というのが人気で、綾瀬はるかさんが主演だったと思いますけれども、主人公は新島八重という女性です。会津藩（現在の福島県）の武士の娘で幕末から明治にかけて活躍して、同志社大学の創始者であります新島襄と結婚して、女子教育にも力を注ぎました。京都で看護学校を初めて創設したのも新島八重さんです。武家娘プラスミッション系という「ハンサムウーマン」のキャラクターもあって、現代の女性の目にも新鮮に映ったようでした。

もう一人、同じ会津藩の武士の娘で若松賤子さんという方も、有名な女性です。児童文学の翻訳をたくさん出した人で「小公子」の翻訳でも知られた方です。彼女は明治維新後に、フェリス女学校で教育を受けた後、明治女学校という、当時大変女学生に人気のあった憧れの女学校でしたけれども、ここを創設した巌本善治と結婚して、女子教育にも力を尽くしました。キリスト教に詳しく外国語に堪能な一方で、論語や漢学も修め、生涯和服で通したという女性です。和洋の教養、伝統的なたしなみを含めて、独自の教養文化というものを目指した人でした。

ここに挙げた女性たちはいずれも、家庭では武家的土台のもとでのしつけを受けて育ってきますけれども、一方、学校では西洋的な学問とか合理的な考え方、キリスト教主義というものを取り入れた教育を受け、その意味で両方の精神を併せ持った女性達でもあったといえましょう。

アンビシャス・ガール

まさに宮城女学校に通っていた、一人の女性「相馬黒光」という方も、そのような意味で大変有名な明治の女学生だったと思います。相馬黒光は、夫とともに、新宿中村屋を創業して、また中村屋サロンという芸術文学サロンを開いたことでも知られる女性実業家です。彼女の生涯は『黙移』いう自伝に詳しく書かれていますけれども、本名は、星良（ほし・りょう）、父親は、仙台藩士で母親は漢学者の娘という厳格な家庭で育ったということですが、たまたま通りかかった教会から聞こえてくる讃美歌に魅せられて、自らキリスト教にも関心を寄せるようになったと、自伝には書かれています。そしてミッションスクールである宮城女学校に入学されているのですけれども、実は彼女の在学中（明治 25 年）に、女学校初の「ストライキ事件」が起こります。

このストライキ事件というのは、ご存知の方もいられるかと思いますが、当時の宮城女

学校はアメリカからの派遣宣教師による教育経営でしたので、西欧式のカリキュラムの授業をしていたということですが、それに対してもう少し日本式の教育を取り入れたほうが良いのではないかという気持ちを持つ女学生たちが学校に抗議をしました。それがもとになって5人の女学生が退学処分になったのです。この5人の女学生のうちの一人は、仙台出身の英語学者として著名な斎藤秀三郎氏[2]の妹さん[3]でもあった。彼女はこの事件後に、明治女学校に移られて、そのあと北村透谷氏とのロマンスでも有名になった方で非常に先進的な女性でした。

さて、相馬黒光は直接この事件にかかわったわけではなかったのですが（学年が下だったので)、しかし女学生の主張に共感して、自分も自主退学することを決めます。それをきっかけに宮城女学校を辞めて、フェリスに移り、さらに明治女学校に、という経過をたどっています。

良妻賢母主義とリベラルアーツ

明治のミッション女学生の中には、彼女たちのように西洋的な学問や文化に憧れて積極的に吸収し、その一方で、家庭で身に付けた武士的な精神とか強靭さも持つ、毅然とした心があったように感じられます。そういう生き方が、NHKのドラマの中では、「ハンサムウーマン」という括りで取り上げられたりしているわけです。

教養の意味に引きつけて言うと、その生き方がかっこいいとかというよりも、読書や学問をすることが単に西洋の知識を詰め込んだり、ひけらかしたりするのではなくて、それを今の自分の状況の中に取り込んで、自分の生き方にする。そういうところにあったと思います。つまり知識を所有する 'to have' ではなく、生きられる知識 'to live' という願望が前にあって、それがフィットした生き方をしたという、現在でも教養の意味を考えていくうえで重要な点であり、学ぶ点であろうと思っています。

しかし世間では、女子が学問をするということ自体が「生意気だ」とか、ミッション女学校については単に「西洋かぶれ」とみられることもあり、特に日本主義のような明治27－8年頃から出てくる批判の中でターゲットにされる時期もございました。

これは女学生全般についてですが、「滑稽新聞」という新聞に掲載された女学生を揶揄する画があります。一例は、エビの姿をする女学生の絵なんですけれども、一見淑やかそうに見えて、今にもエビが跳ね返りそうな「跳ね返り娘」というイメージで描かれています。当時、女学生を（はいていた袴の色から）「海老茶式部」と呼んでいたこととかけて、

---

[2] 1866年、仙台藩士の長男として生まれ、宮城英語学校で米国人教師C. L. グールドに英語を学ぶ。1885年に来日したアメリカ人宣教師W・E・ホーイの通訳を務める。その後、第二高等学校（東北大学）助教授、第一高等学校（東京大学）教授を歴任した。斎藤兆史，2000,『英語達人列伝 ― あっぱれ、日本人の英語』中公新書参照。

[3] 斉藤冬子のこと。透谷に憧れて明治女学校に入るも、1894年5月の透谷の自死と時を同じくして肺結核のため死去。このいきさつは黒光の『黙移』にも記されている。

エビのように、いかにもすぐにチャンスがあれば跳ね返ろうというイメージです。もう一つの例は、こちらはもっとシビアな批判記事なんですけれども、恋愛というのが先進的な生き方で女学生時代を過ごした結果、卒業するころには、子どももできてしまって堕落して故郷に帰らなければならなくなった「堕落女学生」という画です。横に描かれているのは学生の夫なのかよくわからないのですけれど、このような状況になってしまうという揶揄ですね。

ミッション女学生の場合、特に、欧化主義が批判される時期には、そういった批判の矢面に立たされることになりました。雑誌や新聞で「女学生が教会で男性と手を握りあっていた」とか、今から見ればその程度がスキャンダルになっていたのです。そういう状況で、「堕落女学生」というのがたくさん掲載されたりするようになっています。そのようにミッション女学生が、あるいは女学校が批判のターゲットになった時期もあったのですが、その後、大正、昭和と時代が流れていきまして、公立・私立の女学校が出来て女学生の数も少しずつ増えていくようになりますと、むしろミッション女学校というのは、その中でもしっかりとしたポジションを取るようになっていきます。ミッション女学校という意味では、コアな部分のイメージを支える展開になっていきます。

日本の戦前の女学校の教育においては、公立の高等女学校が設立されることにより、女学校の教育目的とカリキュラムがきちんと整理されることになります。学生の皆さんも聞いたことあると思いますが、「良妻賢母」というのが女学校教育、戦前の女子教育の看板なのですね。今は何がそういうものかわからないかもしれませんが。私は自身の大学内で、一度「武家娘と女学生」というタイトルで話をしたことがあります。あとで男子学生が質問に来まして「良妻賢母、たしなみのある女学生というイメージが湧かないんですけど、どんな人なんでしょうか？」と聞かれましたので、「あなたの目の前にいる人よ」と言ったら、学生はきょとんとして「あー・・・」と言って去っていったんです（会場笑）。なかなかイメージしづらいのだと思います。

女学生文化の特徴

さて、戦前期には女子は女学校を終えると、そのまま結婚して家庭に入るというのが一般的だったわけですから、女学校の教育というのは、家庭に入って妻として、母親としてしっかりとした家庭にできることが、一応の学校の目的として掲げられていたことですね。ただ、古いしきたりを守っているというような古風な女性のイメージではなくて、女学校で学んだ新しい家事ですとか育児を取り入れた、近代的な家庭というイメージが、良妻賢母の理想とされていたのだと思います。

男子の旧制中学校と比べて、女学校の外国語や数学、理科の時間数は少なく、その分、家事・裁縫といった、女子だけの科目、あるいは修身や音楽が時間数では少し多かったという状況にありました。とはいえ、実際の女学校の教育の中では、必ずしも良妻賢母教育

の中身が、これをやらなければならないとはっきりしていたわけではなくて、むしろ文学とか芸術といった人文的教養、それからスポーツとか作法とかいろんなものを含んでいたわけでして、それによって人格を涵養することも一方で言われてきたわけです。そういう抽象的表現が掲げられていることが多かった。ですから実際には実用と離れて、広い教養を楽しむということも学生生活にはできた状況があったということになります。

さらに大正期以降になりますと、だんだん職業を持つ女性も増えてきます。当時は職業婦人と言ったわけですけれども、その頃になると、仕事をもって世間を知るということも実際あって、家庭を持って夫を支える場合でも、職場や職業生活を知ることは必要なのだとの説明・解釈がされるようになりまして、職業婦人を含めて良妻賢母教育に組み込まれるという状況も、大正初めから終わりまでかけて広がっていくという、非常に柔軟な概念として使われています。

ミッション系の女学校ではもともと家事とか裁縫といった実用教育だけでなく、キリスト教主義に基づいたリベラル教育というのが教育の柱になっておりました。公立学校でも学校によって実用科目を重視する地方の女学校、最初の頃は実科高等女学校[4]というのがあって非常に裁縫の授業が多いということがあったんですけども、それよりも教養的科目を重点とした高等女学校もあり、いろんなものが多様化する中で、一方では良妻賢母主義を掲げつつ、リベラルアーツを保持する折衷的なやり方をとるところもありました。ミッション系女学校のほうが、リベラルアーツを保持し、一方で良妻賢母教育とも折り合いをつけるという方針を決めたところが多かったわけです。折り合いをつけながら、外国文学・音楽といった西洋的な教養を柱にする、戦略的方法をとったことで、学校の威信を高めていく方向に、機能的にはなったのではないかと思います。

たとえば女学校の中に裁縫科を作りつつ、より高度な教育も行うという女学校が出てきたわけですし、それが戦後の女子大学に繋がっていくということになります。それに伴って、女学校のイメージもキリスト教主義のイメージだけでなくて、そこからむしろ広がっていく英語とか音楽に強い自由な校風を持つイメージに変わっていき、これがミッション女学校の文化として世代を超えて引きつながれていく。さらに、これはブランドイメージにもなりますし、卒業した人たちのプライドであり、共同体としての繋がりをつくっていくイメージになっていく。このことが同窓会を含めた、学校文化を持続する力になっていくと思っています。つまり、かつて女学校教育の柱が良妻賢母主義だったことは間違いないのですが、その中身がきっちり決まっていたわけではなく、むしろ曖昧であったことが、女学生に独自の文化を育んでいく面ともなったということがあります。

考えてみますと、いずれ家庭に入れば、いろんな実用的なことはせざるを得ないわけですから、女学生時代には文学、哲学、音楽、スポーツを楽しみたい。女学生たちが、その

[4] 女子の中等教育機関で、家事・裁縫等の実用的科目に重点を置いた旧制の高等女学校の一つ。

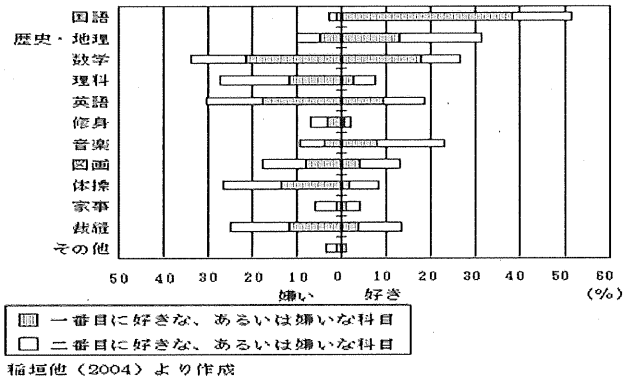
ような欲求を持ったとしても不思議ではないわけで、憧れも出てきます。そういう中でミッション系女学校を含めて女学生文化が生まれてくる。その中身についてご紹介させていただきます。

文学好きと裁縫嫌い

私は関西地域におりますので、戦前からある10校の女学校の卒業生約3000名を対象に調査をしたことがあります。少し前の調査ですけれども、その中で、「女学校時代に好きだった科目と、嫌いだった科目」を尋ねてみましたところ、少々意外な結果が出ました。

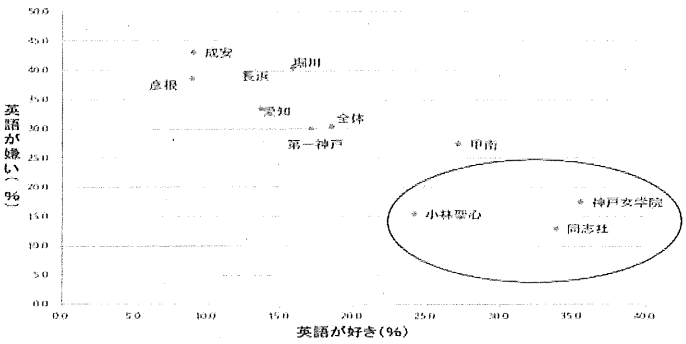
女学校教育の柱になっていた、家事・裁縫については案外人気がなくて、一番好きな科目は国語、というのが共通の状況だったのです。これがそのグラフになるんですけれども（資料1）[5]、一番好きなのは国語で、嫌いな人はほとんどいない。家事・裁縫のところですと、好きな人も十数%いるけれども嫌いな人が二十数%で案外好まれていなかったことがわかります。ただ、学校別にみると、かなり違いが出てきて、特に違いが大きいのは、英語と家事・裁縫です。この資料2のところを見ていただくと、英語を好きな人を横軸、英語が嫌いな人を縦軸にとって学校別にその割合を記録してみると、10校のうち、丸で囲んであります神戸女学院や同志社女学校などミッション系女学校です。これみんな英語が好きで嫌いな人がほとんどいない。それに対し

資料1　好きな科目・嫌いな科目



稲垣他（2004）より作成

資料2　学校別にみた英語の好き嫌い

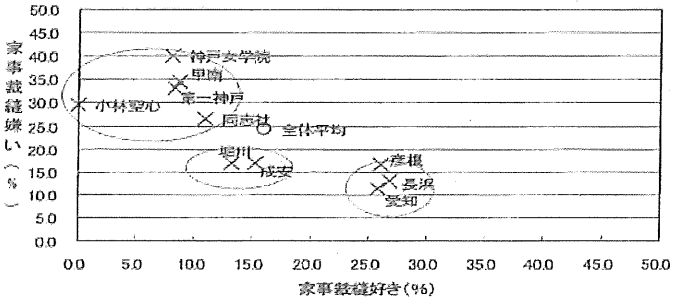


[5] 資料（グラフ）の出典：稲垣恭子他『関西地域における高等女学校の校風と女学生文化に関する教育社会学的研究』（科研費補助金成果報告書、2004年）。

て、堀川・長浜・愛知・彦根というのは京都と滋賀の公立女学校ですが、英語が嫌いな人が今、神戸高校になっていますけれども公立なんですが英語嫌いが多いわけなんですね。これがミッション系学校の特徴になっているといいます。

一方で、こちらの資料3は、家事・裁縫が嫌いだった人が縦、好きだった人が横軸という形で同じように見てみますと、ミッション系は左のほうですね。ミッション系の女学校は家事・裁縫嫌いが圧倒的に多かったのが見て取れます。特に小林聖心に至りましては、家事・裁縫が好きだった人が0%で誰もいませんでした。こういうところにもリベラルアーツを重視した女学校の教育が女学生文化の中にも浸透していたということが伺える、そしてそれがプライドになっていたと感じられるということになります。

資料3　学校別にみた家事志向度



一方で、文学好き・国語好きというのが女学生一般にも共通している文化であって、これはミッション系女学校の方々は文学好きも多かったということでございます。この資料では、国語が1番目ないし2番目に好きだということと、読書についての質問で純文学を読んでいた方との相関が高いということがわかりました。家事・裁縫好きと文学好きは、マイナスの相関です。では、文学好き・国語好きと言えば、どういう本を女学生は好んで読んでいたかというと、当時の資料も含め挙げていきますと、「坊ちゃん」とか「吾輩は猫である」の漱石の小説、樋口一葉の「たけくらべ」、それから、「レ・ミゼラブル」や「小公子」「風と共に去りぬ」といった外国文学。それから、吉屋信子の「花物語」などの少女小説は圧倒的な人気のジャンルでした。このように女学生の読書というのは、文学と少女小説が中心でしたけれども、特に少女雑誌に掲載された少女小説は、文学好きの女学生に幅広く読まれていたものです。

明治の末から大正にかけて、いわゆる少女雑誌が沢山創刊されているわけです。中でもよく読まれたのはこの三つ、「少女倶楽部」「少女の友」「少女画報」でした。「少女倶楽部」が一番発行部数が多いんですけれども、「花物語」は「少女画報」に最初に連載されたものです。

「少女の友」は発行部数では「少女倶楽部」に負けていますが、都会では非常に人気があって、宝塚の紹介も出てますので女学生には大人気だった雑誌です。その中でも人気のあったのが吉屋信子さんの小説。特に「花物語」というのが圧倒的な人気がありました。ご存知の方もいらっしゃるかと思いますが「スズラン」という名前から始まって、「山茶

花」「ヒナゲシ」とか「名もなき花」とか花の名前に関した短い小説を集めたもので、最初は7話で終わっていたんですけども非常に人気があって、もっと続きの話を聞きたい、という投稿が多くあって、さらに続けて54話。源氏物語の帖の数と同じですけれども、何度も単行本にもなっています。昭和14年版の中原淳一の表紙・挿絵は圧倒的な人気があって長く女学生の愛読書になっています。

この挿絵について少しだけ申しますと、夢見る少女、大きな瞳、モダンでかわいい洋服、女学生に圧倒的人気を得ていてこの付録が付くとすぐによく売れたらしく、私の知っている「元女学生」も当時のファッション文化を大事に持っております。ちなみにこの中原淳一の挿絵とよく似た竹久夢二の絵があると思うんですけれども、竹久夢二は当時の女学生にあまり人気なかったようです。なぜかと聞きましたら、竹久夢二が描く女性はだいたい下向きで、斜め下を向いている女性で、ちょっと病気っぽい人。それに比べて中原淳一の少女というのは、現代的な、モダンなお洋服を着て、まっすぐ前を向いて、そして目が宙を見てどこを見ているかわからない、夢を見ているような感じですね。これがいわば未来を夢見る少女の姿ということで、女学生が自分を重ねてそういう風な共感を得た絵だったんです。

女学生が経験できる世界というのは当時でも、家庭と学校にだいたい限定されているんですけれども、読書や小説を通じてもう一つの異なる世界にということが夢だったんだと思いますね。その世界で、友達同士の間で、世界を共有するということも大事にしていたと思います。今携帯で繋がっているのと似ているかもしれませんが、毎日のように手紙を書いてやり取りをする。手紙の文章にもスタイルがあって、年上だと「お姉さま」、下級生だと「〇〇さん」「〇〇ちゃん」というような呼びかけから始まって、最後はかしこで終わる独特な女学生文体で書かれた手紙を楽しむ。そういうコミュニケーションの中で自分たちの独自の感受性共同体を作っていったといえるでしょう。

女学生の稽古事－茶道・華道・ピアノ

もう一つ別の例を挙げますと、女学生文化のもう一つの特徴として、今の学科の勉強とか読書以外に課外活動にも結構力を入れているところも多く、また、個人で習い事とか稽古事をしていた人もいたようです。

茶道・華道・ピアノというのが女学生の三大稽古事・習い事だったわけです。一番多いのは茶道、次は、華道・書道・琴になっていて、だいたいはこのような状態だったんですけれども、他にも都会だと英語を習う人もいて、一人で二つの習い事をしていることもあったようです。

音楽の習い事については、明治には琴が多かったわけですが、だんだんピアノのほうが人気になっていくんですね。琴は古典的なイメージなんですが、大正時代はモダンで洋風なピアノのほうが、ステイタスが上がっていきました。ピアノは場所も取り値段も高く、

漱石は、売れた小説の印税をすべて使いましてピアノを買わされたと書いてます。しかしこれも地域とか学校によって大分差がございます。

先ほど紹介した調査でも、全体的にみると伝統的な稽古事をしている人が結構多い。伝統的なものが横で、やはり公立の女学校が伝統的なものが多いんですね。一方で縦軸がモダンな、ピアノ・バイオリン・声楽・バレエという稽古事ですけれども、ミッション系の学校の方々はそちらも多い。ただ右上方になっていますように一つだけではなく両方やってた人が多かった。

稽古事は、ただ何かを習うことではなくて、実はそれに付随して身体の所作・作法というのを身に着ける機会にもなっていました。ですから、茶道・華道とかで立ち振る舞いですとか小道具の扱い方、それからお茶碗の鑑賞など色々な側面を含んでいるわけです。女学生の教養というのは読書を通したキャリア形成だけではなくて、このようなお稽古事を通して身に着けられる幅広い教養です。立ち振る舞い・身体の作法ですとか非常に広いものというのが一つの特徴ということになります。

モダンと伝統－女学生の教養文化

一方で、家庭、女学生たちの家庭生活がどのようなものなのか表にしております（表は略）。「家庭で大切にしていた行事をどのくらいやってましたか？」とういうのを一覧にしてみたものです。一番上がお正月。お正月はまあ、すべての家庭で中心的行事なっていますけれども、クリスマスについては圧倒的にミッション系女学校で高くて、それ以外のところで低い。それからお盆・命日・法事・地域行事と言った行事は、やはり京都や滋賀の女学校は非常に高いわけなんですけれども、ミッション系の女学校では相対的に低く、その代わり子どもの誕生日のお祝いとか、稽古ごとの発表会、美術・音楽発表会のような家庭行事は非常に高いと、特徴的な結果になっています。

今ご紹介しました調査は関西の女学校に限定されたものではありますが、ここから類推しますとミッション系女学校の文化というのはモダンと伝統をミックスした女学生文化の共通性をもって、よりモダンで幅広い教養志向だったことが伺えるのではないでしょうか。もちろんその中でも違いはあるわけですけれども、英語とか国語といった文学的な教養を中心に、稽古事とか家庭文化を通して音楽や美術にも親しんでいた、オールラウンドな教養が多かったのが特徴としていえるのではないかということです。

実用だけではなく、実用から距離をとって、すぐに役に立つわけではないけども影響あるもの。そういう風な音楽とか美術とか、これも努力して短期間に身に着けるというものではなくて、才能とか感性で長期にわたって家庭で培われていくものが教養に繋がるイメージ、これがミッション系女学校のブランドのイメージに繋がっていきます。

あらためて女学校文化の共通の特徴としてまとめたのがこの図です。（図 1）

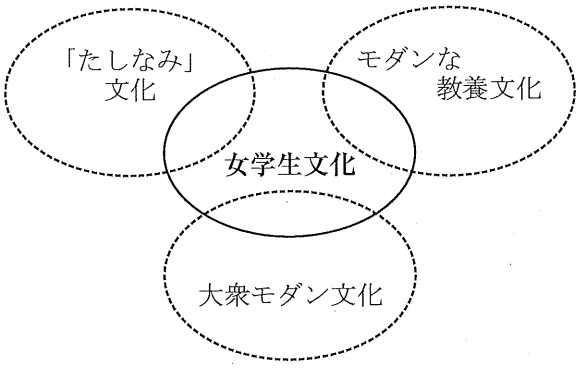


図1　女学生文化の特徴　出典：稲垣恭子『女学校と女学生』中公新書, 2007

時代とか女学校の校風、それから生徒の家庭背景などによってもちろん少しずつ違いはありますけれども、全体としてみれば文学などの読書を中心にしたのが「モダンな教養文化」ですね。学科の勉強とか西洋的なものの読書を通して教養を身に着ける。それ以外にも右側のような稽古事とか趣味を通して、音楽や美術やスポーツを楽しむ「たしなみ文化」。それから少女小説とか少女雑誌のようなメディアを通して「大衆モダン文化」に接する。これら三つに接していくなかで、それらが融合した文化が女学生文化だったといえます。

そういう意味では、この三つの世界とそれぞれ接触しながらも融合するような形で作られていった、生活全体にわたる境界的文化。ミッション系女学生の文化というのは、こういう女学生文化を表象するような存在だった。

繰り返しになりますけれども、女学校の教養、あるいは文化というのは、職業に直接つながるような、あるいは専門的地位ともつながっているわけではなく、かといって、主婦になったときに役に立つ実用な知識に限定されているわけでもなく、人生というものをどのように経験して味わっていくのか。つまり教養とつながったものであったということは、重要な点だったのではないかと思います。

作家の田辺聖子さんは、吉屋信子の小説が大好きだったと言っています。吉屋さんの少女小説は女学生とか少女の友情やロマンテックで切ない感情がきめ細かく描かれたとても乙女チックな小説で、読み上げると恥ずかしいような表現も出てくる本なんですけれども、田辺さんの女学生時代というのは、全く小説とは違って太平洋戦争に入ってまさに軍国主義の時代だったわけです。だからこそ彼女は、吉屋さんの小説を読むことでそういう戦争に突入していく自分たちの現実と距離をとろうとした、巻き込まれながらも距離をとって自分の世界を維持していくことが出来たんだと自伝の中にも書いておられます。本を読むということは、戦争という過酷な現実の中でも自分が理想とする世界を維持していくことと繋がっていたとその中で書いておられます。

それから作家の林真理子さんは自分の母をモデルにした「本を読む女」という小説を書

いています。主人公の小川万亀（まき）が、ずっと本を読んで暮らしたいという本好きで、古本屋を始めるくらいなんですが、大人になって結婚してからもずっと本を読んでいた。そしてずっと「このまま大人になりたくない」というくらい本好きだったんですけども。実際に大人になって結婚して、いろんな困難に出会うんですけども、その時にやはり、昔、少女時代に読んだ本をもう一度読み直して、そしてそのことによって励まされたと書いています。

つまりお決まりのコースで結婚して子どもを育てて、ということ自体が大切で生きがいなのだけれども、その中でも文学少女であり続けるということが生きることの意味となって、今の私というものを問い詰めている。ですから女学校時代の思い出を今でももって、女学校卒業者もいくつになっても女学生っぽいところがいくつかあって可愛いところがあると私は思うんですけども。

それは今を生きなおすうえでも糧になっていく。その意味では、非常に学校経験が大切で卒業してもなおその当時の思い出を共有することができたのだと思います。

溜め込む教養、たしなむ教養

少々理想化して話したかもしれませんが、このような教養文化というのは一般に言われる「教養主義」の文化とは違ったものだと思います。いわゆる教養主義と言われているのは、旧制高校から出発した男子の学生文化で、これは読書を通して内面を形成する、簡単に言えばそういう風に見返されていると思います。その読書の仕方というのは簡単に言うと好きなものを読むというフリーな読書ではなくて、読むべき本という高校生になったからには読んでおかなければならない本があって、そういうものを最初は難しくても、ちょっとわからなくても努力して頑張って読んで、そして身に着けていくという刻苦勉励型の読書だったわけです。だから、好きだからというよりも正統派読書として読まなければならない物を読むというのがあって、そういう意味では知識を所有して溜め込むという、「溜め込み型」の教養（竹内洋[6]）の側面もあった。戦前に旧制高校に進学する人はごく少数でしたから、そこで共通であったことがエリートの証なんですね。自分の為だけではなくて、それをひけらかす面が全くなかったとは言えない。

それに対して女学生の教養文化とは、権威のあるものをどれだけ得るかではなくて、自分の感性に合うかどうかが大きかった。そういう意味では男子の溜め込む教養に対して言うならば、たしなみの教養であるということが言えるのではないかと思います。

これまで話してきましたように、男子の教養主義とは異なるもう一つの教養の形態として、この女学生の文化と教養というのが現代の教養、これからの教養を考えるヒントになっていくのではないかと思います。

---

[6] 竹内洋，2003，『教養主義の没落：変わりゆくエリート文化』中公新書参照。

最初に触れましたように、今では教養と言うと、役に立たないものが教養だと思われていたり、物知り博士のように思われがちです。現代の社会で生きていく上では、生活していくための実用的な知識とか、それから職業生活に必要な専門的知識が重要であることは言うまでもない。医者になるためには医学の専門知識と手術の専門知識なども必要ですし、もし弁護士になれば高度なもう一つの知識も必要なことはもちろんのことです。専門的知識を効率的に習得していくためには、専門知以外のあれこれに興味をもつよりも、専門に集中したほうが効率的でもありますし、早く身に着けることが出来るという面があることは確かでしょう。

しかし、狭い専門だけの世界からイノベーションは、あるいは創造性というのはなかなか生まれてこないと思います。伝統芸能の第一線の方とか現代芸術、ファッションにも造詣の深い方々を見ても、新しいアイディアとか創造性というのは一つの狭い領域から生まれてくるというよりも、異質なものとの接触の中で生まれてくることが多いのではないでしょうか。

費用対効果を考える面もありますけれども、規格化を超えたオリジナリティを発揮していくためには、専門に限らない広い教養が下支えしていることが多いと思うんですね。近年のように技術革新の進展の時代には最先端の知識を持ってることは重要ですが、逆に知をどんどん深めていくというわけです。

広範な能力のロボットが取って代わる、そういう時代だからこそ、むしろロングスパンで通用するものはなにか、ロボットに変わってもらえないものはなにかを改めて考える時期ではないかと思っています。

そういう意味で、現代に通用するのは教養の力ではないでしょうか。

本来の教養とはなんだろうか。簡単に付け加えさせていただきますと、まず知的好奇心。役に立つかどうか、職業と直接つながっているかどうかだけではなくて、「自分が知りたい」「自分と生きている世界と繋がった」知的好奇心を持つこと、またそれを発揮すること。具体的なモチベーションを教育がどうやって掘り起こしていくのかが大切なことだと思っています。次に、教養というのは目の前のことを迅速かつ効率的に処理するのには役立たないかもしれないけれども、そこから距離をとって、やっていることの意味を吟味し直したり、これからの方向性を定めるといったときの批判的総合的力、これが教養の力であると思います。ただ決めたことを実行するだけではなくて、それは本当に意味のあることなのか、もっと変えたほうがいいのではないか、吟味していく。これも教養から生まれていく力だと思います。そして、もう一つ重要なのは、ポスト近代型の教養。これからの教養に要求されるのは、コミュニケーション力でしょう。異質な分野とどうやって連携してコミュニケーションをとって融合させていくのか。より奥行きのあるオリジナリティや創造性を発揮するためにはコミュニケーション力が非常に重要なわけです。

本来はコミュニケーション力というのは、ただ社交的に話を合わせることが出来るとか

そういうことではなくて、異質な他者と正面から向き合い、自分も他者も変容する、自分の存在をかけたコミュニケーションをいうのです。これが対話的教養と言われるものでありますが、それにはやはり教養というもの、知的好奇心に裏付けられた教養というものが本来のコミュニケーション力を支えていくと私は思っております。

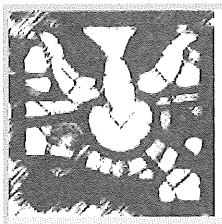
教養というのは知識の根底だけではなくて、どうやって知識を運用するか、コミュニケーションに乗せていくか、そういう運用する力でもあって、それはこれからの社会に必要な新しい教養に繋がっていくものだと思っています。そういう意味では、今回社会史的に振り返った女学生の知の系譜は、これからの教養を考えていくうえでももう一度見直して参考にする、そのきっかけになればと考えています。

主体的な学び、教養を育んでいくうえで、本人が知的好奇心をもって学ぶということが重要であり、良い先生・良い友人と出会うことは非常に大きいと思ってます。学ぶことの面白さとか楽しさを知るうえで周りの人のコミュニケーション、特に良い友達、良い先生と出会うということが重要ですし、稽古事や習い事だけでなく、体を通して、他者とのコミュニケーションを通して覚えていくこと、目に見えない日常のこういった文化を継承していくことが非常に大事です。短期的に収益が上がることだけに注目するのではなく、長期的に継承していく文化、繋がっていく文化の大切さをお伝えして、終わります。

稲垣恭子先生 プロフィール

京都大学大学院教育学研究科教授　博士（教育学）
専攻　教育社会学・文化社会学
主な著書に『女学校と女学生』中公新書、2007、『子ども・学校・社会－教育と文化の社会学』（編著）世界思想社、2006、『教育における包摂と排除－もうひとつの若者論』（編著）明石書店、2012、『教育文化の社会学』放送大学教育振興会、2017 など多数。

付記：本講演は JSPS 科研費・基盤研究（C）（17K04570 研究代表 片瀬一男）の助成を受けたものである。



宣教師たちの夏休み
～宮城学院宣教師たちの軽井沢における別荘所有の変遷～

現代ビジネス学部教授　宮原　育子

はじめに

2016年に宮城学院は創立130周年を迎えた。この年、宮城学院女子大学には新しい学部として、現代ビジネス学部が開設された。東日本大震災後の変化する東北の地域社会の中で、営利・非営利を問わず多様なビジネスの場面で活躍できる女性を育成することが目的である。特に、観光や国際交流、地域ビジネスなど、女性が活躍している分野に注目している。

さて、現代ビジネス学部の新任教員として、宮城学院の創設時の歴史は大変興味深いものと感じた。特に、観光学の研究に携わる筆者が驚いたのは、宮城学院が近代日本の観光発展に大きく関わる、「日本三大外国人避暑地」のうち2か所に土地を所有していることである。日本三大外国人避暑地は、主に明治期の外国人宣教師たちが開いた3か所の別荘地を指し、宮城県七ヶ浜町の高山と、長野県軽井沢、野尻湖のことである。宮城学院は、このうち高山と軽井沢に土地を所有している。特に軽井沢は、現在も日本を代表する高級避暑地として名を馳せており、皇室関係者をはじめ、財界人、文化人など著名人の別荘が多数存在することで知られている。資料室やOGの事務職員の方に伺うと、軽井沢には、かつて宮城学院に関わりのあった外国人宣教師の山荘が存在し、2008年に老朽化のために取り壊されたことが分かった。資料室からいただいた2009年度の「宮城学院資料室年報」の資料紹介には、「ハンセン先生、リンゼー先生と軽井沢山荘－ハンセン宣教師資料からみる－」[1]があり、その中でハンセンが軽井沢での生活を詳細につづった書簡の和訳やその当時の写真などが紹介されており、この資料は、外国人宣教師による別荘地軽井沢の発展を知る貴重な手がかりであることが分かった（写真1）。

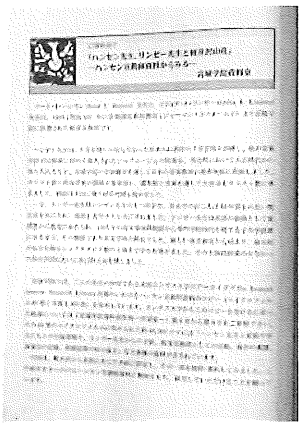


写真1.「宮城学院資料室年報2009年度」

また、ハンセンとリンゼーの山荘は、1957年に宮城学院同窓会に寄贈され、使用されていた軽井沢彫のダイニングテーブルと椅子などは同窓会に保管されており、これらも当時の外国人宣教師の生活を知る上での大変貴重な資料であると考えられた。

そこで、本研究では、宮城学院の外国人宣教師たちの軽井沢における別荘所有の変遷や彼らの夏休みの在り方を探り、近代日本における避暑地の誕生と観光の発展について考えてい

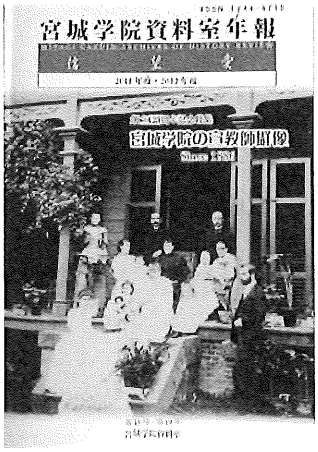


写真2.「宮城学院資料室年報 2011年度・2012年度」

きたい。研究方法としては、宮城学院の資料室に保管されている様々な資料と、軽井沢町史や、軽井沢の別荘の発展に関する学術論文や著書及び一般社団法人軽井沢会の「軽井沢ハンドブック」などの中から、宮城学院に関わった宣教師の名前を拾い上げながら組み合わせて、探っていくものである。なお、宣教師たちの来歴は、宮城学院資料室年報 2011 年度・2012 年度「創立 125 周年記念特集　宮城学院の宣教師群像 Since 1886」[(2)]（写真 2）を参考にした。

本研究は、筆者が宮城学院女子大学に着任して 2 年目から着手したもので、キリスト者でもなく、日本のキリスト教史を学びながらの手探り状態であるため、不備な点やさらに検討を要する箇所が多々あろうかと思われるが、まずは研究で得た知見を試論としてまとめる。今後は長年宮城学院の歴史をたどってこられた諸先輩方にもご意見や情報を賜れば幸いである。

1. E.R. プールボー校長の夏休み

軽井沢の話に入る前に、宮城学院初代校長 E.R. プールボー（1886 年着任～ 1893 年離任）と日本三大避暑地のひとつ、宮城県七ヶ浜町の高山についてふれたい。

宮城学院のスタートは、明治維新後の日本におけるキリスト教の宣教活動の一環としての女子教育のスタートであり、初代 E.R. プールボー校長をはじめ、アメリカ合衆国改革派教会から歴代の多くの宣教師たちが、言葉も文化も異なる女子たちの教育にまい進し、数多くの卒業生を送り出した。また卒業とならずとも宮城学院を縁として社会に羽ばたいた女性たちを見守ってきた。特に、プールボー校長の書簡[(3)]（写真 3）からは、武家社会が色濃く残る東北に単身赴き、仙台に着任後すぐに女子学校を立ち上げる重い任務や、開学後の学校経営の困難さ、本国の教会との予算折衝や東北学院の押川方義や W.E. ホーイとの関係、生徒たちとの関係など、日々対応し解決すべきことが山積している中で、疲労しながら責任を全うしようと孤軍奮闘する姿が浮かび上がっている。その書簡の中で、プールボー校長が心待ちにしていたのが夏休みである。仙台滞在の後半には、宮城県七ヶ浜町の高山（花淵浜）から本国へ発信した書簡も見られる。夏休みに仙台の雑事から離れて、七ヶ浜の海辺の空気に触れながら体力と気力を回復させている様子も書かれている。

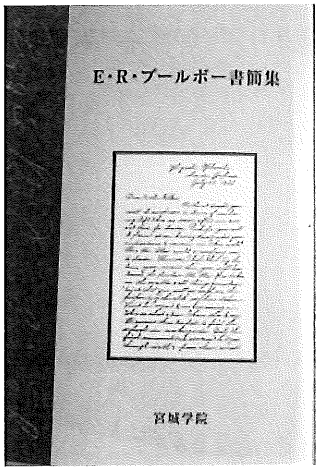


写真3.「E.R.プールボー書簡集」

プールボー校長の書簡の発信地のひとつ「高山」は、宮城県宮城郡七ヶ浜町花渕浜字高山である。外国人の避暑地としての高山は、1888（明治21）年仙台の旧制第二高等学校（現東北大学）の英語教師であった米国聖公会の宣教医 F.W. ハーレルが狩猟で七ヶ浜町を訪れたことに始まるという。彼は、1887年に仙台神学校（現在の東北学院）に着任した米国改革派宣教師の D.B. シュネーダーとともに、日本人の友人の名義で高山を別荘用地として10年契約で借り受けた。その後、仙台在住の米国人宣教師によって7棟の別荘が建てられ高山の別荘地としての歴史が始まった[(4)]。

1890年には、米国から西洋野菜の種子も持ち込まれ、次第に外国人が増えていったという。1893年にプールボー校長が帰国するまでの夏は、高山の滞在が他の機関の外国人との交流や米国風の生活に触れながら、束の間、異国での雑事を忘れる機会になっていたのではないだろうか。

このように、明治期に来日した外国人宣教師たちは、初期のころから日本社会でのマイノリティとして教派を超えて交流し、結束を固めていったと思われる。特に教育関係に携わる宣教師たちは、夏にまとまった休暇を取ることが可能であり、夏休みを過ごすための別荘は日本での日常の過酷な環境を耐えるための必要不可欠な装置だったと考えられる。

プールボー校長が夏休みを過ごした高山の別荘は、本人が借りたのか、別の宣教師の別荘に滞在したのかは現時点では分かっていない。しかし、宮城学院が所有している高山の土地は、吉田浜で、プールボー校長が滞在していた場所とは少しずれるようだ。資料室の『80年史』[(5)]によると、1932年から宮城学院の高山海岸キャンプが始まり、1936年に土井晩翠が宮城学院に吉田浜字沢尻に所有していた土地500坪「心照荘」を寄贈している。この「心照荘」は、土井晩翠の長女照子が病死した地であり、土井晩翠は照子が宮城女学校で学んだ記念として寄贈したという。以降、戦争が激しくなるまで吉田浜で女学校のキャンプが行われたという記録がある。心照荘の碑は、現在七ヶ浜町波多崎にあるが、東北電力火力発電所の立地の際に宮城学院の土地を譲り、他の土地を譲り受けたということから、現在の場所は土井晩翠寄贈の土地ではないようだ。またその土地は訪ねる人もなく、荒地のままであるようだ。高山における外国人避暑地の形成の歴史は大変興味深いものがあり、これから述べる軽井沢ともつながりが予測されるが、今後の研究課題としたい。

2. 避暑地軽井沢のはじまり

外国人の3大避暑地のひとつ「軽井沢」は、現在の人口約2万人の長野県軽井沢町が中心であり、年間850万人もの観光客が訪れる日本有数の観光地のひとつでもある（図1）。

軽井沢は、皇室とも関わりが深く、多くの政治家、財界人、文学者や音楽家など著名な人々が別荘を持ち、社交の場としての避暑地として不動の地位を築いてきた。戦後は、大

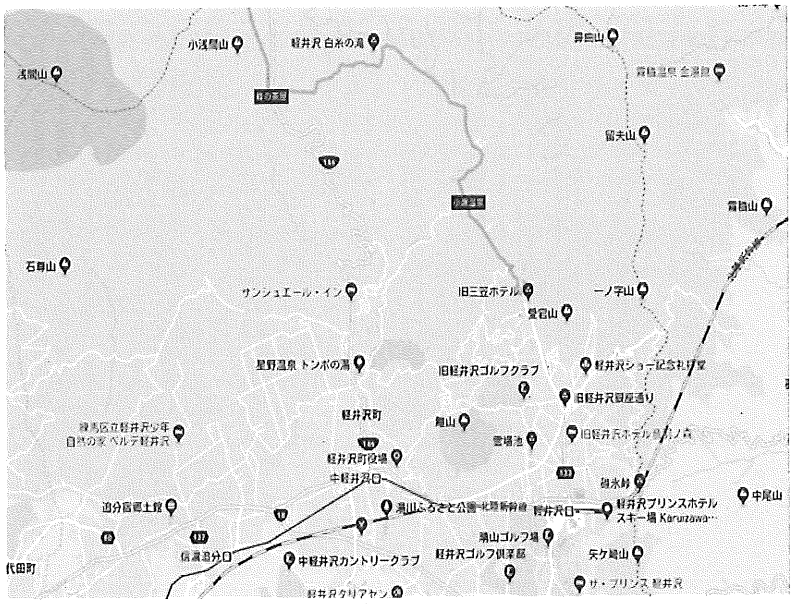


図1．避暑地軽井沢の地図　Google マップから
(https://www.google.co.jp/maps/@36.371672,138.6076065,13z?hl=ja)

手デベロッパーによる大規模な別荘地や高級ホテル、リゾート施設などが整備され、軽井沢の大衆化が進められた。また、企業の保養所や、大学などの教育機関の研修所なども多く立地している。最近では、大規模なショッピングセンターも開設し、軽井沢の歴史探訪や観光以外の目的で軽井沢を訪れる人々も多くなった。

この軽井沢の避暑地としての発展の歴史は、『軽井沢町史』[(6),(7)] の他、中島松樹編（1987）の『軽井沢避暑地 100 年』[(8)] や宮原安春（1991）『軽井沢物語』[(9)] に詳しいが、ここでは、軽井沢町観光経済課の資料「軽井沢案内 2018」[(10)] をもとに概述する。

軽井沢は、江戸時代、中山道の碓井峠越えの宿場町のひとつとして栄えたが、明治維新後は新道の開設などにより次第に衰退してきた。そうした中で、1886 年にカナダ生まれの英国聖公会宣教師アレキサンダー・クロフト・ショーと、東京帝国大学文科大学教授の J. ディクソンと内地旅行の途中で軽井沢に立ち寄った。その後、ショーは、つるや旅館主人の佐藤忠右衛門の斡旋によって、使われなくなった旅籠を買い取り、1888 年には大塚山に移築した。その別荘では、軽井沢を来訪した友人の宣教師やお雇い外国人教師たちがショーとともに夏を過ごすようになった（写真 4、5）。

軽井沢町観光経済課の資料「軽井沢案内 2018」によると、1889 年の夏には避暑客が 30 名を超えたとある。その後、鉄道の整備も進み、1893 年には碓井峠にアプト式鉄道が導入され、横川から軽井沢間が開通し、人々は徒歩での山越えから解放され、東京から軽井沢までの移動が容易になった。また、福井県代議士で海軍大佐の八田裕二郎氏が日本人で初めて別荘を建て、日本の上流社会に紹介した。八田氏は、軽井沢を健康地でありスイス

写真4．A.C.ショーの胸像と記念礼拝堂　ショーによって創設された軽井沢最古の教会
このエリアが軽井沢避暑地発祥の地とされる

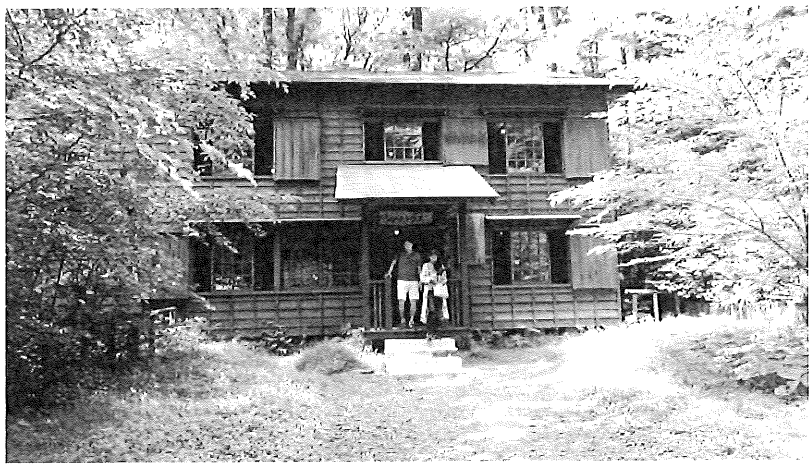


写真5．ショーハウス記念館　ショーが最初に建てた別荘を移築復元したもの

のモンブラン付近に優る避暑地であると喧伝した。同年には、外国人避暑客の指導によってかんらん（キャベツ）が初めて栽培された。その後、軽井沢への別荘建設は進み、テニスコートが開設され旅館は外国人専用のホテルへと改造が進んだ。1904 年には、山本直良が西洋風三笠ホテルの建築に着手し、1906 年には営業を開始する（写真 6）。

このころまでに、別荘は 102 戸に増えていった。同年には、三井財閥の三井三郎助によって、日本女子大学夏季寮「三泉寮」が開設され、最上級生 40 名が 3 週間の滞在によってその教育に大きな成果を上げた。1897 年には、D. ノルマンらを中心として、超教派的な合同教会、軽井沢合同基督教会（現ユニオンチャーチ）が創立された。1910 年には総理大臣桂太郎が離山に別荘を建てるなど、軽井沢がますます名士の別荘地としてその名を

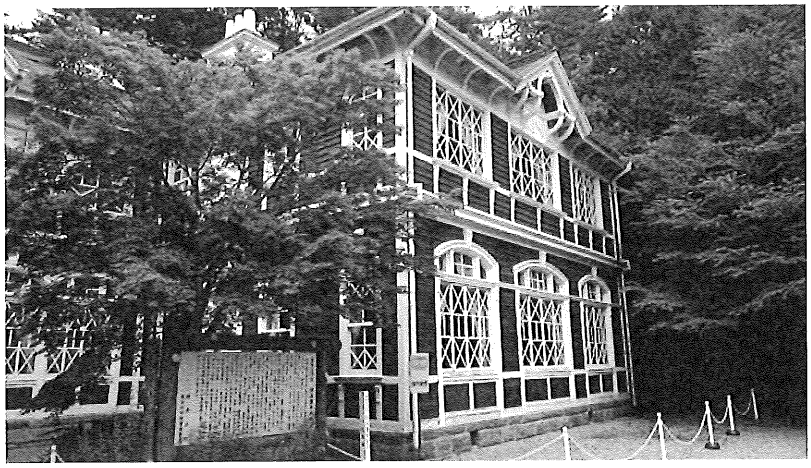


写真6. 旧三笠ホテル　国の重要文化財として内部も公開されている

馳せた。この年の避暑客宿泊者数は、日本人 5,406 人、外国人 6,597 人にもなり、延べ宿泊人泊は、約 12 万人泊を超えるようになった。1916 年には D. ノルマンをはじめ、内外人有志によって「軽井沢避暑団」が設立され、以来、軽井沢の避暑は、「来訪者の心身の鍛錬向上と文化教養に寄与するもの」とし、「会員は品行方正にして節操の人たるを要す」「飲む・打つ・買う」の追放など、今日の軽井沢憲法の原型が出来上がった。

1917 年以降は、日本人による別荘地開発が進み、西武の堤康次郎が、千ヶ滝の開発に着手し、別荘地は軽井沢町の様々な地域に拡大していく。

3. 軽井沢に最初に別荘を持った東北の宣教師

前述のように、1886 年に A.C. ショーが軽井沢に入ってのち、大正時代にかけて軽井沢は急速に外国人宣教師や教師、外交官など様々な人々の別荘地として発展していく。佐藤・斎藤（2004）は、歴史地理学の観点から、地籍資料（土地台帳と公図）を用いて初期の別荘所有者の研究を行った [11]。それによると 1905 年時点で、外国人別荘用地は 18 ヶ所であり、そのうち 8 ヶ所は 1892 年以前に登記されたものである。佐藤らは、この別荘は、1893 年に東京からの鉄道が開通するのを見越して建てられたと推測している。しかし、1893 年から 1899 年までは、鉄道が開通したにも関わらず、別荘用地は増加しなかった。その理由は、1899 年に不平等条約が改正されるまで、外国人は居留地とその隣接地域に居住地を限定されており、土地所有も禁じられていたためであると指摘している。従って、1890 年代の外国人別荘は、日本人の名義で土地が登記されていた。

佐藤・斎藤の論文では、1899 年のいわゆる国内雑居開始以前の軽井沢における別荘所有者は、プロテスタント宣教師が 6 名、横浜の商館が 2 件と、イギリス公使をあげている。6 名のプロテスタント宣教師の中に、活動地を仙台に持つ、アメリカ改革派の宣教師

「J.H.D. フォレスト」（まま）と記載がある。ジョン・キン・ホイド・デフォレストのことである。J.H. デフォレストは、アメリカン・ボードの宣教師として 1874 年来日した。彼は西日本で宣教活動をしたのち、1886 年に家族で仙台に移住し、新島 襄、富田鐵之助とともに宮城英学校の創設に携わる [12]。翌年、宮城英学校は東華学校となり、新島襄が校長、J.H. デフォレストは理事に就任する。東華学校は、1892 年に閉校となるが、彼は 1911 年に死去するまで東北地方での救済活動に努めた。彼の 2 番目の妻、S.E. デフォレストは、1899 年から 1902 年まで宮城女学校の音楽の教師を務めている [2]。

J.H. デフォレストの別荘は、1905 年時点で旧中山道の西側の愛宕山山麓に位置する南高瀬という地域に位置していた。佐藤・斎藤論文によると、この別荘の用地は、まず 1890 年以降に聖公会司祭の杉浦義道の名義となり、実質は大阪の聖公会アメリカ人宣教師の H.D. ペイジが所有した。杉浦義道の父はペイジから洗礼を受けていたという。そして、内地雑居の始まった 1899 年に、その別荘はデフォレストの所有となっている。ペイジとはデフォレストが大阪で活動していた時以来の知り合いと考えられ、その縁で別荘の所有権を引き継いだと思われる。デフォレストの別荘所有は 1905 年時点で記録があるが、1925 年には、所有者は外国人であることは示されているのみで所有者が不明となっている。デフォレストは、1911 年に病を得て東京の聖路加病院で逝去したため [12]、彼の軽井沢での別荘所有は、1899 年から 1911 年の間の数年であると考えられる（図 2）。

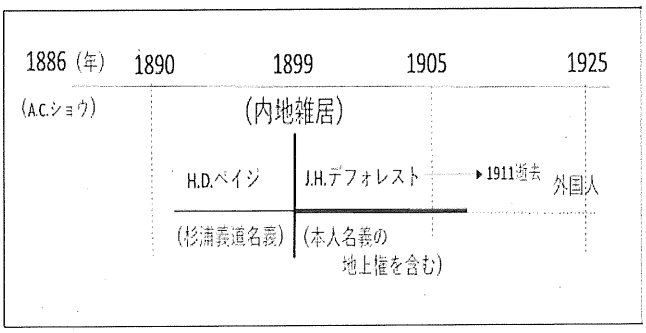


図2. 軽井沢町南高瀬のJ.H.デフォレストの別荘所有の変遷（佐藤・斎藤；2004[11]をもとに作成）
1899年の「内地雑居」を機に日本人名義の外国人宣教師の別荘がJ.H.デフォレスト名義の別荘となっている。

4．桜の沢（ハッピーバレー）の宣教師たち（1908 年～ 1917 年）

1902 年には、旧中山道の東側にある桜の沢に萬平ホテルが移転し、夏季には多くの外国人宿泊客で賑わうようになった。1910 年ごろになると、軽井沢には外国人別荘が 134 軒、外国人向け貸別荘が 25 軒を占め、かつては宿場町の通りは、外国人向けの食糧や衣料品、雑貨などを扱う商店街となり、ここを中心として避暑地の中核が形成された。そして、その外縁部にも日本人の別荘を交えて別荘地が拡大してきた [10]。

萬平ホテルが移転した桜の沢には外国人の別荘が建てられていった。東北学院や宮城女学校にゆかりの宣教師たちも、この桜の沢に別荘を所有した。宣教師たちは、この桜の沢を「ハッピーバレー」と呼んだ。軽井沢では、1916 年に D. ノルマンらによって避暑地の自治組織「軽井沢避暑団」が結成されたが、避暑団は 1914 年から毎年別荘のハンドブックを作成しており、避暑団が「軽井沢会」となった現在まで発行されている [13]（写真 7）。

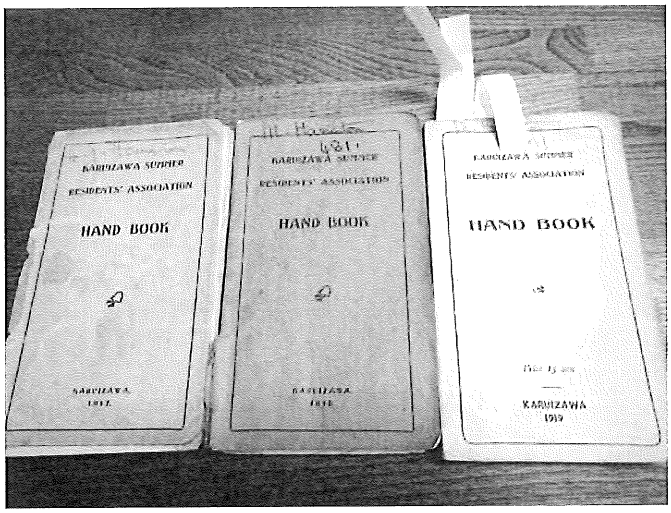


写真7. 軽井沢避暑団発行の「ハンドブック」1917年から1919年
一般社団法人　軽井沢会所蔵　（2018年10月撮影）

筆者は、2018 年 10 月に軽井沢会の軽井沢事務所を訪問し、1917 年からのハンドブックを閲覧させていただいた。1917 年のハンドブックには、J.P. モール、H.K. ミラー、W.G. セイプル、K.I. ハンセン & L.A. リンゼイの氏名が見え、この時期までにすでに宮城女学校関係者が、桜の沢に 4 軒の別荘を所有していたことが分かる。また、近隣には、A.K. ライシャワー、エドウィン・O. ライシャワー駐日大使の父の別荘もあり、ハンセンの書簡からライシャワー一家とも交流があったことが分かっている [1]（写真 8、図 3）。

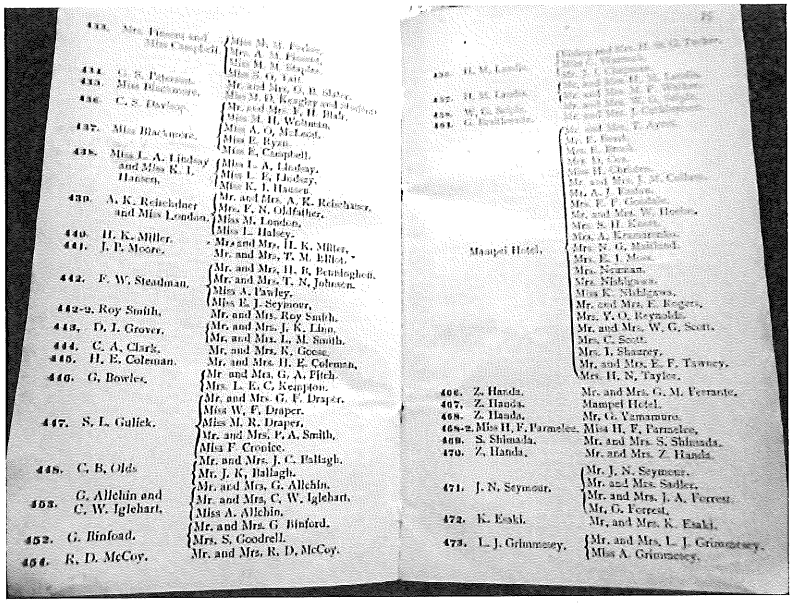
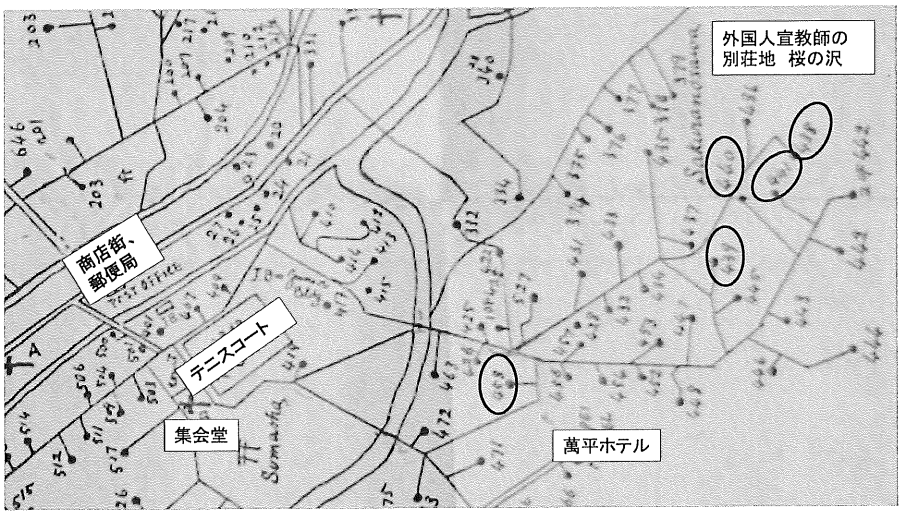


写真8. 1917年版ハンドブック　別荘番号と所有者、居住者名を示すページ
No.438にリンゼー＆ハンセン、No.440にH.K.ミラー、No.441にJ.P.モール、No.458にW.G.セイプル4名の宮城女学校関係者の名前と同居者の名前が示されている。No.439はA.K.ライシャワー所有。(2018年10月撮影)



別荘番号：440 H.K.ミラー、441 J.P.モール、438 リンゼー＆ハンセン、458 W.G.セイプル、 439 A.K.ライシャワー

図3. 1917年の桜の沢の別荘位置図；桜の沢の別荘番号のほとんどは外国人名義である。別荘番号374 ～ 380は近江ミッションが所有している別荘で、19名の外国人名が登録されている。
(1917年版軽井沢避暑団のハンドブック付録のマップに加筆作成)

この4軒の別荘の所有者の来歴について、宮城学院資料室年報(2012)[2]を参考に述べる。

J.P. モールは、1889 年から 1891 年まで仙台神学校（現東北学院）で教会史とギリシア語を教え、1893 年から 1894 年に宮城女学校の第 2 代校長を務めた。夫人の A.M. モールも副校長として英語と聖書を教えている。J.P. モールはその後、東京や米国を経て仙台に帰任し、1912 年から 1919 年ごろまで東北学院の理事に就任している[14]。H.K. ミラーは、1892 年から 1895 年に東北学院で教師を務め、その後、山形や秋田へ伝道し、1908 年から 1909 年に宮城女学校第 4 代校長を務めている。1898 年に彼と結婚した夫人のサラ S. ミラーは、1908 年から 1910 年まで宮城女学校で英語を教えていた。W.G. セイプル（以降サイプル）は、1905 年から 1936 年まで東北学院の教師として勤務し、1908 年から 1911 年は、宮城女学校の理事として聖書考古学を教授している。また夫人の F.L. サイプルは、1908 年から 1931 年まで音楽（声楽）と英語の教師として宮城女学校に在籍した。K.I. ハンセンは、1907 年から 1951 年まで校長代理や理事、音楽科学科長を務め、音楽、聖書、英語を教授した。L.A. リンゼーは、1907 年から 1951 年まで、ハンセンと同様に校長代理や理事、英文学科長を務め、英語や聖書を教授した。

桜の沢の 4 組の宣教師たちは、それぞれ隣接する敷地に別荘を建てていた。4 組のうち誰が最初に別荘を建てたかは定かではないが、J.P. モール、H.K. ミラー、W.G. セイプルの 3 名は、1917 年当時は東北学院に所属していた。

宮城学院資料室年報（2010）の資料紹介「ハンセン先生、リンゼー先生と軽井沢山荘－ハンセン宣教師資料から－」[1] の中では、ハンセンとリンゼーは 1908 年 7 月に初めて軽井沢を訪れ、以後、毎夏を軽井沢で過ごしている。1908 年のハンセンの書簡では、日本に来て 1 年目の夏にミラー夫人の勧めもあって軽井沢で過ごすことにしたこと、軽井沢には、サイプルが連れて行ってくれたことが書かれている。また、同年 8 月の書簡でも軽井沢で行われたテニスの大会でリンゼーが参加したこと、男子シングルスでゾーグが優勝したことが書かれている。このことから、1908 年までには、ミラーやサイプルも軽井沢に滞在しており、また、ゾーグ（東北学院神学部部長）と夫人（宮城女学校教師）も滞在していたことが分かる。軽井沢の宿泊先の手がかりとして、1910 年の書簡には、「この別荘を毎年借りるなら、このミッションの不格好な家の少なくとも壁紙くらいは素敵にさせるわ。」という記述があり、ハンセンとリンゼーは自分たちの別荘を所有する前には、「ミッション」の別荘を借りていたことがうかがえる。1917 年の軽井沢避暑団のハンドブックによると、桜の沢には近江ミッション所有の複数の別荘が存在しており、そこは貸し別荘だった可能性がある。そして、1914 年 8 月の書簡には、ハンセンとリンゼーが、「ミラーの別荘の上の土地を買うことにした」ことが書かれており、1915 年には「サイプルの別荘と同じようなバークハウスを建てるつもり」と伝えている。この記述から、ミラーやサイプルの別荘は、1914 年までには建てられていたと推測される。そして、1915 年 7 月のハンセンの書簡では、「軽井沢　自分たちの別荘に来て 1 週間がたつ」と書かれている。

同年 8 月の書簡には、別荘の様子と軽井沢での生活が詳しく書かれており、自分たちの別荘を持った喜びがつづられている。8 月の牧場への旅には、ハンセンとリンゼーとともに「サイプル夫妻、クリーテ夫妻、エドマンズ夫妻、アンケニー、ミラーが同行した」と書いてあり、1915 年ごろには、別荘を持たない東北学院や宮城女学校の関係者たちも軽井沢で夏休みを楽しんでいることがうかがえた。この時期には別荘を持たない外国人は、萬平ホテルや、貸し別荘などを利用できたことが町史などから分かっているが、ハンセンとリンゼーをはじめ、宮城女学校の関係者もそうした施設を利用したか、または、同僚の別荘に滞在したと考えられる。先述の東華学校の J.H. デフォレストの別荘所有は、1899 年から 1911 年と推測されるが、ハンセンとリンゼーが軽井沢を訪れた 1908 年には、既にミラーやモール、サイプルが軽井沢で彼と交流を持っていた可能性もある。また、ミラーやモール、サイプルの別荘所有のきっかけもデフォレストによるものの可能性が考えられる。

5. 1930 年の軽井沢避暑団ハンドブックから（花里論文を参考に）

1930 年の軽井沢における外国人宣教師の別荘所有に関しては、花里（2012a）の優れた研究がある [15]。花里は、1930 年版のハンドブックを使い、バンドブックにおける外国人別荘所有者のリストと聖職者の所属団体の一覧表を作成している。それによると、この時期は、別荘数も 819 戸にのぼり、別荘を所有する外国人の 80%が宣教師であることが確認されている。また宣教組織も 29 と多岐にわたっていた。これは、1894 年からプロテスタント系の宣教師たちが超教派で「軽井沢会議」を開催して以来、1930 年で 29 回を数え、軽井沢がキリスト教系の宣教師たちの貴重な情報交換の場として定着していたと考えられる。

1930 年までに外国人別荘が増加したことから、郵便局所管の別荘番号の付け替えが行われた。

花里の作成した一覧表を確認して、1930 年時点で、桜の沢の宮城女学校関係者は、新たな別荘番号によると、1345 番ミラー、1273 番サイプル、1319 番ハンセン＆リンゼーであり、モールの別荘は 1307 番 F.B. ニコデマスに所有が変わり、新たに 1306 番 G.W. シュレイヤーの別荘が加わっていることも分かった（図 4）。

F.B. ニコデマスは、1934 年から 1953 年まで宮城女学校の英語の教師と理事をつとめた E.N. ニコデマスの夫である。1910 年ごろには来日していた。花里（2012b）[16] によると、当時は、軽井沢において軽井沢避暑団が主催するテニストーナメントや、ゴルフ、音楽コンサート、チェスなどのレクリエーションが盛んに行われており、ジャパンタイムズ紙がそれらの行事を紙面に掲載していた。1930 年 8 月 5 日には、軽井沢避暑団主催のコミュニティコンサートの演奏者と演目一覧が掲載されており、それによると、コンサートでは、1 番目に別荘番号 1307 の F.B. ニコデマス氏と別荘番号 1312 の S. スミス氏が、バイ

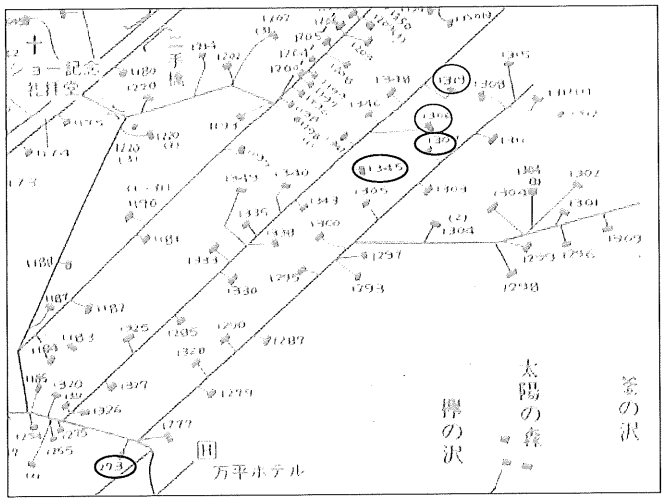


図4. 1930年における宮城女学校関係の宣教師別荘位置図；No.1319　ハンセン＆リンゼイ、No.1345　ミラー、No.1273　セイプル、No.1307ニコデマス、No.1306　シュレイヤー
（2002年軽井沢会ハンドブック付録マップに加筆作成）

オリンデュエット、ゲバウアー作曲「アレグロとロンド」を演奏し、6番目には、F.B.ニコデマス氏が、バイオリン独奏、チャイコフスキー作曲「アンダンテカンタービレ」を演奏したとある。このことから、F.B.ニコデマスについては、1930年には既に地元のコミュニティの一員として存在すると思われることから、1930年以前にJ.P.モールの別荘を引き継いだと思われる。J.P.モールについては、軽井沢避暑団のハンドブック1923年版にはまだ名前が記されているが、東北学院100年史によると、1924年に引退してアメリカに戻ったとあるので、F.B.ニコデマスがJ.P.モールから別荘を引き継いだのは、彼の帰国が理由で、それは1924年以降であると考えられる。

この時期に新たに加わったG.W.シュレイヤーは、1922年に来日し、妻のC.L.シュレイヤーは、1957年から1959年に宮城学院女子大学の英語の教師を務めている。シュレイヤーは、1930年に岩手県盛岡に宣教師として赴任して以来、50年以上にわたり、盛岡で布教活動や子女の教育に携わり、夫妻でキリスト教センター善隣館を創設した[17]。軽井沢避暑団のハンドブックの1923年版には、名前が載っていないが、1930年以降には掲載されていることから、シュレイヤーの別荘取得も、1924年以降で、彼もまた別の外国人または宣教師の別荘を譲り受けたと思われるが、現時点では確認ができなかった。

6. 1930年以降の別荘の所有の変化

1930年以降、さらに軽井沢避暑団の1936年版のハンドブックを確認すると、この年からミラーの別荘の所有が「盛岡クリスチャンセンター」に代わっている。これは、前述の盛岡で活動をしていたシュレイヤーとの関わりがあるものと考えられる。ミラーは別荘の

所有が変わっても軽井沢を訪れ、ハンセン＆リンゼーとの交流を続けていた可能性がある。また、ニコデマスの別荘（No.1307）は、1937年に川端康成が購入している。ニコデマスは、1937年に死去しており、夫人や家族がその機会に手放したと思われる。川端康成氏は、以前からつるや旅館などに逗留しながら軽井沢を訪れており、『雪国』で得た賞金で、1937年に1307番の外国人宣教師から別荘を購入したといわれており、軽井沢避暑団のハンドブックでも、1307番は、1936年にニコデマスから、1937年に川端康成氏へと所有者が移動したことが確認できた（写真9）。

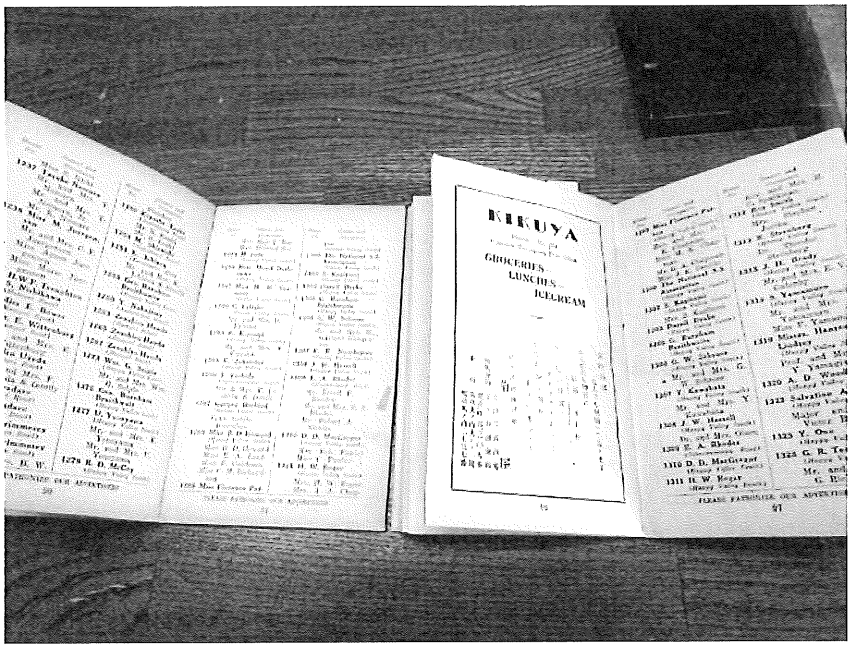


写真9.　1936年（左）と1937年（右）のハンドブックのページ
1936年No.1307ニコデマス所有の別荘は、1937年に川端康成の所有となった。
（2018年10月撮影）

ちなみに、1937年の冬には、川端康成氏の別荘を借りて、堀辰雄氏が『風立ちぬ』の最終章「死のかげの谷」を書いたといわれている[18]。幸福の谷と呼ばれたこの別荘地は、冬の寒々しい風景とともに堀辰雄の当時の心象風景を表していたのだろうか。川端康成は、1941年にさらにNo.1305ブレスウェイト所有の別荘を購入し、以後の川端康成の別荘として登録されている（写真10）。

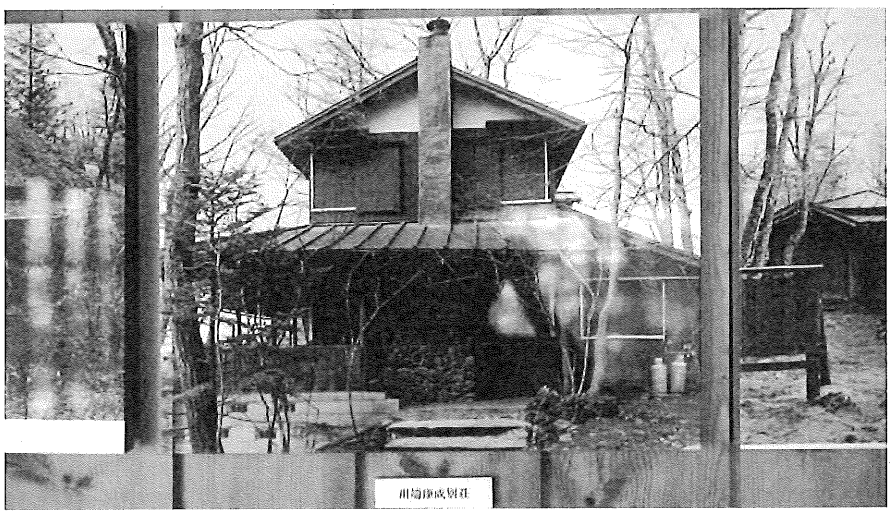


写真10.　川端康成別荘写真　ショーハウス記念館に展示されていた写真を撮影
この別荘は1941年に購入した2番目の別荘No.1305に建つものと思われる。
(2017年7月撮影)

7. 戦後の別荘の所有　1985 年のハンドブックから

第二次世界大戦の勃発により、多くの米国人宣教師たちが帰国を余儀なくされた。ハンセン＆リンゼー両氏も 1941 年に一度帰国している。彼女たちの軽井沢の別荘はそのままにしていたようである。1947 年に再来日して、宮城学院で教鞭をとり学校の復興に尽力した。そして、再び軽井沢での夏休みを取り戻した。1951 年にはそれぞれ帰国し、1957 年ハンセン＆リンゼー両氏は、宮城学院同窓会に対して軽井沢の山荘を寄付した。

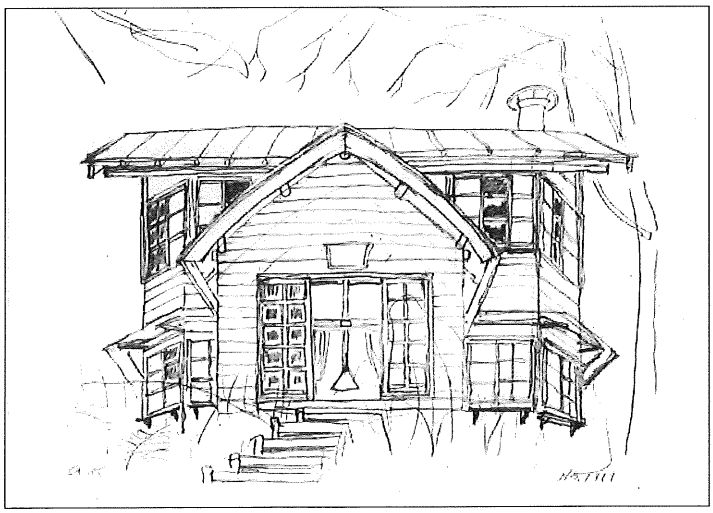


写真11.　ハンセン＆リンゼーの山荘玄関前のスケッチ
(別荘番号1290小谷 明氏より2017年寄贈)

その後、宮城学院同窓会では、東京支部の同窓生が中心となり、ふたりの山荘を守りながら、軽井沢での夏の活動を行い、2008年には山荘が老朽化したため、取り壊しとなり、跡地だけが残った。また、隣接するシュレイヤ ― 館は、1962年に宮城学院が取得したが、この山荘も取り壊しとなった。

宮城学院同窓会が所蔵している軽井沢会のハンドブック1985年版で、宮城学院の宣教師たちの別荘の所有者を調べると、この時期にはほとんどが日本人の所有となっていた。

1992年には、軽井沢の住民有志たちが軽井沢の歴史ある別荘の保存に向けて、軽井沢別荘建築等保存調査会を発足させた。1994年には、軽井沢ナショナルトラストが発足した。この年には、「第一回別荘建築をたずねて」と題した別荘見学ツアーが開催され、地元関係者や大学生たちが参加した。このツアーのコースには、「宮城学院の多角形の別荘」が含まれていた[19]。後年、軽井沢ナショナルトラストから、同窓会や宮城学院に対して、山荘の保存に関わる照会があったとのことだが、こうした、歴史的な建築を保存する動きに対応できなかったことは残念であった。

8. 宮城学院軽井沢山荘跡地の現在

2017年と2018年のフィールドワークで、宮城学院同窓会と宮城学院の山荘跡地を訪問した（写真12)。ふたつの別荘地跡は、桜の沢、ハッピーバレーの谷頭部の高台にあり、当時の川端康成氏の別荘地（No.1305）に隣接している。2017年は7月に訪問したため、下草が生い茂り、敷地を囲む木々もうっそうとして、ハンセン＆リンゼーが楽しんだといわれる別荘からの眺めはさえぎられていた。現在の管理は、地元の管理会社によって、年2回の草刈を行っているだけだが、旧シュレイヤー館の跡地の宮城学院の看板などは倒れて草に埋もれ、すぐには跡地とは分からなかった（写真13)。

写真12.　宮城学院同窓会　軽井沢山荘　ハンセン＆リンゼー別荘跡地
(2017年7月撮影)

写真13.　宮城学院山荘　シュレイヤー館跡地
(2017年7月撮影)

写真14.　宮城学院山荘から桜の沢「ハッピーバレー」を見下ろす。奥に見える別荘は、No.1305川端康成の別荘と思われる。(2017年7月撮影)

ふたつの敷地内を歩き回った結果、道標のような石柱を発見した。ひとつには、「ハンセン・リンゼー」、「シュレイヤー」、「ミラー」と「ブレスエート」と書かれていた（写真15～18)。

写真15. 山荘敷地内の道標　リンゼー・ハンセン

写真16. シュレーヤー

写真17. ミラー

写真18. ブレスエート

（写真15. ～ 18.　2017年7月撮影）

隣接するそれぞれの別荘の方向を示すものと思われた。「ブレスエート」は、別荘番号1275、ジョージ・ブレスウエイトで、聖学院学術情報発信システムの黒木 章の論文によると、ブレスウエイトは、1886年に英国聖書協会の代表として来日し、「英国基督教書籍販売会社」の経営を担い、日本各地を旅行し日本でのキリスト教伝道に広く貢献した。大日本帝国憲法や各地の条例を翻訳し、解説を付けたり、全国主要道路地図を含んだ外国人のための旅行案内書を作成した。また、1888年には勝海舟などの援助を受けて東京赤坂病院を建て、特に貧困層の治療に尽力した。そして、1930年に日本で病死したとある。彼の名前は、1917年のハンドブックには記載があるので、ミラーやハンセン＆リンゼーとも交流があったと思われる。彼の別荘の位置は、ちょうどハッピーバレーの入り口2本の道の分岐点にあり、それは、山荘への目印として認識されていたものと思われる。

現在、宮城学院同窓会、宮城学院の敷地には、この石柱以外には、当時を思い起こせるようなものはなく、やはり山荘の建物がないことは、とてもさびしく思われた。

9. 軽井沢の歴史の活用について

本研究では、軽井沢における宮城学院に関係した宣教師の別荘所有の歴史を追った。様々な文献や軽井沢避暑団発行のハンドブックに基づいて調査した結果、東北に在任した宣教師たちの中で、軽井沢に最初に別荘を持ったのは、1899年、東華学校のデフォレストであった。そして彼と前後して、モール、ミラー、セイプルが桜の沢に別荘をかまえ、1908年ごろには、宮城学院に関係する宣教師たちが軽井沢で楽しむ様子がハンセンの書簡からうかがえた。その後、1915年にハンセン＆リンゼーがミラーの隣に山荘を建てた。モールの別荘は、1924年ごろにニコデマスの所有となり、同じ頃にシュレイヤーがハンセン＆リンゼーの隣地にあった他の外国人から別荘を買い取った。1936年にはミラーの別荘は、盛岡キリストセンターの所有となり、1937年にはニコデマスの別荘が、川端康成氏に買い取られた。第二次世界大戦後には、セイプルの別荘が日本人の所有に変わった。ハンセン＆リンゼーの山荘は、戦後も彼女たちに所有され、1957年に宮城学院同窓会に対して寄贈された。同窓生たちは、山荘を管理保管し、合宿所として活用していたが、2008年山荘の老朽化のため取り壊され、93年の歴史を閉じた。

かつて宮城学院関係の宣教師たちが夏休みを過ごした軽井沢のハッピーバレーは、現在うっそうとした森になっている。筆者が訪れた2017年7月でも、森の中に点在する別荘に人影はなく、別荘地を歩くのはカメラを持った観光客であった（写真19）。

写真19. 桜の沢ハッピーバレーの佇まい
うっそうとした森の中に別荘が点在し、人影はなく静まりかえっていた。
(2017年7月撮影)

このハッピーバレーの中に、往時の宣教師たちの別荘の姿をしのぶことができる建物があった。別荘番号 1287 の同志社大学「シーモアハウス」である（写真 20)。シーモアハウスの外観を見学したところ、建物は 2 階建てで、外側に杉の皮を貼ったいわゆる「バークハウス」である。玄関前の小さなテラスにはバーベキューセットが置かれ、建物の脇には自転車が数台置かれてあった。同志社大学施設部今出川校地施設課に問い合わせたところ、同志社大学で英語教師をしていた E. シーモアの別荘を所有者から寄付されたもので、現在も大学のセミナーハウスとして使用されていることだった。セミナーハウスは大学の学生、教職員が利用できるが、京都の大学が軽井沢の別荘を直接管理するのは難しいので、現地での宿泊者への受付や建物の管理は地元の会社にまかせてあるとのことだった。また担当者の話から、シーモアハウスの建物の老朽化や、利用者の減少などで、歴史的な別荘建築を保有し続ける難しさの一端も推測することができた。

宮城学院同窓会と宮城学院の場合、山荘の建物は取り壊されて、現在敷地のみとなっているが、山荘があった桜の沢、ハッピーバレーは、明治から大正時代にかけて外国人宣教師による軽井沢の別荘開発の歴史の中心地であり、また、ここで夏休みを過ごした宮城学院に関わった宣教師たち自身がその歴史をつくってきた存在でもある。また、ハンセン&リンゼーの山荘は、宮城学院同窓会が寄贈を受けて、当時の学生や同窓生たちが大切に使用した。

同窓生の何人かに当時のお話しをうかがったところ、山荘で初めて、コーヒーとトースト、サラダといった西洋式の朝食をいただいたという思い出に始まり、洗濯や買い物の合間に、静かな軽井沢の中で友とともに聖書を読み、賛美歌を歌った時間の素晴らしさを語

写真20. 同志社大学がセミナーハウスとして利用している宣教師の別荘「シーモアハウス」（2017年7月撮影）

ってくださった。彼女たちからは、軽井沢での夏の経験が、学生たち相互の友情と愛校心を育んだことを感じることができた。

今回の調査を通してハンセン＆リンゼーの山荘と隣接するシュレイヤー館の跡地は、宮城学院の学生たちの思い出の場であるとともに、軽井沢の歴史の一部であるということが良く分かった。今後は、この貴重な場所を活用して、さらに宮城学院の学びの場を作ることも可能であると考える。活用の方法としては、①跡地を再整備し、敷地境界線の明確化、記念碑の建立や、説明看板の設置などが考えられる。②これまでの研究の成果や同窓生の声などを掲載した山荘や軽井沢のガイドブックを作成することも可能であろう。③これらを活用し、学習ツアーのフィールドとして活用できる。宿泊は近隣のホテルにして、軽井沢の観光や、軽井沢ナショナルトラストが保存活動を進めている歴史的な別荘建築の見学、キリスト教史、日本文学者の別荘めぐりと軽井沢文学をたどる旅など、テーマは尽きない。これらのテーマが、宮城学院の山荘とつながっていることは重要である。④さらに将来、跡地にセミナーハウスが建てられるようになれば、セミナーハウスに宿泊しながら、③の活動や、会議、コンサート、シンポジウムなど、さらに宮城学院の活動を広げることが可能であろう。

今後は、学校全体で、軽井沢に山荘の跡地を所有していることの意義と価値を深めていくことが望まれる。

おわりに

本研究では、軽井沢における宮城学院に関係した宣教師の別荘所有の歴史を追った。今回の調査を通じて強く感じたことは、この別荘跡地が所在する桜の沢という場が、近代か

ら現代の日本の歴史にとって大変重要な価値を持つということである。それは、明治期からのキリスト教の日本における宣教活動の歴史の一端が存在することとともに、今回の研究では触れることができなかったが、この桜の沢に集った宣教師の中には、太平洋戦争下における対日宣教政策に関わった者もおり、戦後のアメリカの占領統治政策にも影響を与えているという（原；2012）[20]。

外国人宣教師が明治期から軽井沢に集まった理由として、一般には日本の湿度の高い暑い夏を避けてのことと言われるが、その他にも、軽井沢が当時衰退しつつある宿場町であったことから、空き部屋の存在と、宿場町が備えていた旅人への様々なサービスを柔軟に外国人向けに変化させていくことができたこと、また、鉄道が敷かれてからは、交通の利便性の高い別荘地となったことが大きく、宣教師は教派を超えて夏場のコミュニティをつくり、全国で布教や教育をしている宣教師たちの重要な情報交換の場として発展していったことなどが指摘されている（江川；2015）[21]。このように、軽井沢全体の発展過程についても、研究の余地は多くあると考えられる。

今後は、学校関係者がこの山荘跡地に光を当てて、ハード、ソフトの両面から整備を進め、学校内外の多くのキリスト教関係者や教育関係者、学生たちに開放し、近代日本の歴史の学びの場を創造していくことを期待したい。

謝辞

本研究を進めるにあたっては、宮城学院資料室の前担当西川 淑氏と現担当の佐藤亜紀氏に宣教師や山荘関係の資料を探し出していただき、ご提供いただいた。同窓会の長井祥子会長をはじめ同窓会の皆様には、所蔵の資料をお貸しくださり、軽井沢彫の家具などを見せていただいた。岩井陽子前会長と佐藤美千代氏には、軽井沢山荘の思い出を学生たちに語っていただいた。事務部の太田富美子総務人事部長には、軽井沢に関する地図や資料などをご提供いただいた。ハッピーバレーに別荘を所有される小谷 明氏からは、軽井沢山荘のスケッチや資料をご提供いただいた。同志社大学施設部今出川校地施設課の小楠篤志課長には、シーモアハウスの保存と利用についてお話しをうかがった。軽井沢会の軽井沢事務所の田嶋正晴所長には、貴重な軽井沢避暑団のハンドブックの閲覧と撮影を許可いただき、軽井沢テニスコートに関する資料のご提供もいただき、本研究に大きな進展を得ることができた。有限会社一彫堂の代表取締役堀川正久氏には、同窓会室に保管されている山荘のテーブルセットが、一彫堂の初代が手掛けたものであることをご確認いただいた。また、軽井沢彫についての歴史などをご教示いただいた。宮城学院女子大学現代ビジネス学部の渡部美紀子教授には、現地に同行していただき、現場のディスカッションで様々なヒントを得ることができた。宮城学院嶋田順好学院長には、本学の宣教師についてご教示いただいた。以上の方々をここに記して、お礼申し上げる。

参考文献・参考 Web サイト

1) 宮城学院資料室（2010）資料紹介「ハンセン先生、リンゼー先生と軽井沢山荘」－ハンセン宣教師資料からみる－．宮城学院資料室年報『信・望・愛』2009 年度　第 16 号，96 － 117.

2) 宮城学院資料室（2012）宮城学院資料室年報『信・望・愛』2011 年度・2012 年度 第 18 号・第 19 号.

3) 宮城学院（2007）『E・R・プールボー書簡集』

4) 関西学院学院史編纂室（2002）「ベーツ第 4 代院長の手紙と写真と油彩画～高山国際村（宮城県）での調査～．学院史編纂室便り No.16.　http://museum.kwansei.ac.jp/archives/gakuinshi/letter/198/（2018 年 2 月 14 日参照）

5) 宮城学院資料室『80 年史』

6) 軽井沢町誌刊行委員会（1988）『軽井沢町誌　歴史編（近・現代編）』軽井沢町誌刊行委員会．754p.

7) 軽井沢町誌刊行委員会（1991）『軽井沢町誌　民俗編』軽井沢町誌刊行委員会．336 p.

8) 中島松樹編（1987）『軽井沢避暑地 100 年』国書刊行会 .196p.

9) 宮原安春（1991）『軽井沢物語』講談社．444p.

10) 軽井沢町観光経済課（2018）「軽井沢案内 2018」軽井沢町観光経済課．71p.

11) 佐藤 大・斎藤 功（2004）明治・大正期の軽井沢における高原避暑地の形成と別荘所有者の変遷．歴史地理学，46 － 3（219），1 － 20.

12) 櫻井一弥（2017）デフォレストとは誰か；重要文化財「デフォレスト館」について，小特集：国の重要文化財に指定された「東北学院旧宣教師館」（デフォレスト館）．東北学院史資料センター年報 Vol.2，10 － 11.

13) 軽井沢避暑団「軽井沢ハンドブック」各年

14) 東北学院（1989）『東北学院 100 年史』.692 － 695.

15) 花里俊廣（2012a）戦前期の軽井沢の別荘地における外国人の所有・滞在と対人的環境の様態．日本建築学会計画系論文集．Vol.77 No.672, 247 － 256.

16) 花里俊廣（2012b）．1930 年頃の避暑地軽井沢における外国人の社会活動．日本建築学会計画系論文集．Vol.77 No.676, 1283 － 1292.

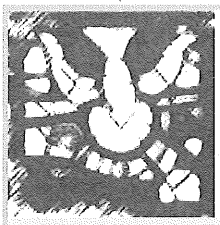
17) シュレイヤー先生の思い出　ドイツ語会話の先生；岩手大学のホームページ http://structure.cande.iwate-u.ac.jp/german/schraeyer.htm

18) 避暑地の散歩道　幸福の谷・ハッピーバレー軽井沢町；「信州スタイル」のホームページ https://shinshu-style.com/karuizawa-region/town-karuizawa/happyvalley/

19) 軽井沢ナショナルトラスト（1995）KARUIZAWA　NATIONAL　TRUST 軽井沢ナショナルトラストだより．No.1.

20) 原 真由美（2012）太平洋戦争下におけるアメリカ・バプテストの宣教政策に関する

一考察．関東学院大学「キリスト教と文化」．第 10 号．69 － 80.
21）江川良武（2015）別荘地・軽井沢の発展過程の研究　その一－各高原別荘地の比較を通して見るその特殊と普遍－．信濃史学会「信濃　第 3 次」67（8）．563 － 580.



宮城女学校第１回卒業生特定について

資料室　佐藤　亜紀

宮城学院資料室には、1893（明治26）年に宮城女学校を卒業した第１回生の卒業写真がある（写真1)。４名の名前は、宮本むら、関屋ゆき、石井とき、武田かね である。

宮本むら、関屋ゆき に関しては名前入り写真が残っていたのですぐに人物特定ができたが、石井とき、武田かね の写真は、この卒業式写真のみであった。

そこで宮城学院132年の歴史の中で発行された様々な刊行物を手掛かりに、人物特定を試みたところ、４名の卒業時の年齢が判明し、そのことにより残りの２名を特定することができた。

FIRST GRADUATES OF THE GIRLS' SCHOOL: OMURASAN ON THE RIGHT.

（写真1）宮城女学校　第１回卒業生の写真

調査の結果、向かって右から順に

① 宮本むら（21歳）

② 関屋ゆき（17歳）

③ 石井とき（24歳）

④ 武田かね（20歳）

である。（　）内は卒業時の年齢である。

そこでその根拠と、参考にした資料をそれぞれに記すことにする。

①宮本むら

４人の集合写真右下にOMURASAN ON THE RIGHTとある。彼女の生涯をアンナ・M・シュネーダー[注1]が、「OMURASAN」[注2]で書き記し、略歴から卒業当時の年齢は21歳で、個別写真もある（写真2)。

②関屋ゆき

E・R・プールボー書簡集[注3] 38頁に、「学内で最年少たった10歳の可愛らしいセキオユキさん」という文章があり、そこから卒業当時の年齢は17歳であることが分かる。個別写真もある（写真3)。

MIYAMOTO O MURA SAN

（写真2）宮本むら

OYUKISAN AND OMURASAN WITH MISS HOLLOWELL.

（写真3）関屋ゆき（向かって左）

③石井とき

彼女の個別写真は残っていなかったが、宮城女学校50年史[注4] 7頁に、「母校50年記念に際して」と題し、石井氏の詠んだ詩を発見した。そこに1935（昭和10）年66歳と記されていた。そのことから生まれた年と卒業した年齢がわかった。

（1869（明治2）年誕生。卒業時の1893（明治26）年には24歳）。一番の年長者である。

④武田かね

彼女について、個別写真・年齢を決定づける資料は宮城学院にはなかった。しかし、小原勝昭氏から紹介の論文、「明治初期における信州上田のキリスト教の受容 ― バイブル・ウーマン小島弘子とその所蔵図書を中心として ―」[注5] に彼女の略歴が書いてあった。

（1873（明治6）年誕生。卒業時の1893（明治26）年には20歳）。

石井とき、武田かねのどちらが残りの二人かを特定するにあたり、私は卒業時の彼女たちの年齢に着目した。向かって左側二人を比べると、明らかに座っている女性の方が年齢を重ねているように見える。当時の礼節感覚からすれば、自分より年長者を椅子に座らせるのは当然のことである。更にまた、関屋ゆき と 武田かね は親戚（従姉妹？）関係ということも注5の論文からわかっているので、どこか顔も似ている。以上のことから、向かって一番左が武田かね、次に座っているのが石井とき という推測ができる。

最後にこの調査のきっかけは、宮城光信理事長の友人である小原勝昭氏からの第1回卒業生写真依頼から始まった。その依頼がなければ、改めて顔と名前とを特定することはなかったであろう。今回の調査にあたり、相談に乗っていただいた前資料室担当の西川淑様、同窓会の事務局の方々に感謝を捧げたい。

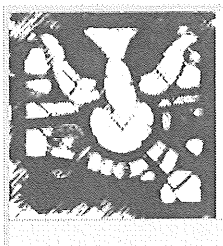
注 1　Anna M. Schneder（1868-1941）東北学院第 2 代院長ディヴィッド・B・シュネーダーの妻で、合衆国改革派教会宣教師の夫と共に来日し、生涯を仙台の地で神の御業にその身を捧げた女性。

注 2　Anna M. Schneder が 1905 年にクリスチャンとしてのおむらさん（宮本むら）の生涯を冊子にして刊行。宮城学院資料室年報第 21 号にその翻訳がある。

注 3　「E・R・プールボー書簡集」宮城女学校初代校長のエリザベス・R・プールボーが母国の伝道局に送った書簡集。翻訳し 2007 年に発行。

注 4　宮城女学校創立 50 周年を記念して 1936（昭和 11）年に発行。

注 5　「明治初期における信州上田のキリスト教の受容―バイブル・ウーマン小島弘子とその所蔵図書を中心として―」宮下史明・矢内義顕；早稲田商学同攻会（早稲田大学）文化論集第 34 号抜刷、2009（平成 21）年 3 月発行。



□彙報

2018（平成30）年度彙報

宮城学院資料室

資料の蒐集・受贈関係（2018年3月1日～2019年2月28日）

以下の資料受贈について感謝をもって報告いたします。（敬称略。冒頭の4桁数字は受贈・受領月日）

（1）定期刊行物関係

受領月日	刊行物名	発行元
0308	白金通信　No. 493	明治学院大学
0308	校史　Vol. 28	國學院大學
0316	國學院大學 校史・学術資産研究　第10号	國學院大學研究開発推進機構
0316	一粒の麦　No. 1	西南学院
0319	機構ニュース　Vol. 11 No. 2	國學院大學研究開発推進機構
0322	東京大学文書館ニュース　Vol. 60	東京大学文書館
0329	青淵　第829号　4月号	渋沢栄一記念財団
0329	琉球だより　No. 06	沖縄公文書館
0329	東北大学史料館だより　No. 28	東北大学学術資源研究公開センター史料館
0331	東北学院時報　第744号	学校法人東北学院
0404	キリスト教史学会会報　170号	キリスト教史学会
0404	大分県公文書館だより　第25号	大分県公文書館
0406	白金通信　No. 494	明治学院大学
0414	第3回発表会報告集	近代仙台研究会
0424	名古屋大学大学文書資料室ニュース　第35号	名古屋大学大学文書資料室
0425	大学史資料室ニュース　第22号	大阪市立大学大学史資料室
0502	青淵　第830号　5月号	渋沢栄一記念財団
0605	大学時報　3月号	日本私立大学連盟
0605	大学時報　5月号	日本私立大学連盟
0608	青淵　第831号　6月号	渋沢栄一記念財団
0614	京都大学　大学文書館だより　第34号	京都大学大学文書館

受領月日	刊行物名	発行元
0614	東北学院時報　第745号	学校法人　東北学院
0629	青淵　第832号　7月号	渋沢栄一記念財団
0704	白金通信　No. 495	明治学院大学
0727	わだつみのこえ記念館　記念館だより　No. 12	わだつみのこえ記念館
0730	青淵　第833号　7月号	渋沢栄一記念財団
0730	國學院大学研究開発推進機構ニュース　Vol. 12	國學院大學研究開発推進機構
0801	ARCHIVES 沖縄県公文書館だより　第55号	沖縄県文化振興会公文書管理課
0810	東北学院時報　第746号	学校法人　東北学院
0817	大学時報　7月号	日本私立大学連盟
0831	青淵　第834号　9月号	渋沢栄一記念財団
0915	東京大学文書館ニュース　Vol. 61	東京大学文書館
1002	大学時報　9月号	日本私立大学連盟
1002	青淵　第835号　10月号	渋沢栄一記念財団
1002	白金通信　No. 496	明治学院大学
1012	東北学院時報　第747号	学校法人　東北学院
1029	青淵　第836号　11月号	渋沢栄一記念財団
1107	京都大学　大学文書館だより　第35号	京都大学大学文書館
1107	琉政だより　No. 8	沖縄県立公文書館
1129	東北学院時報　第748号	学校法人　東北学院
1129	史料室だより　第24号	恵泉女学園史料室
1130	青淵　第837号　12月号	渋沢栄一記念財団
1210	白金通信　No. 497	明治学院大学
1217	明治学院歴史資料館ニュースレター　No. 10	明治学院歴史資料館
01044	青淵　第838号　1月号	渋沢栄一記念財団
0106	東北学院時報　第749号	学校法人　東北学院
0204	青淵　第839号　2月号	渋沢栄一記念財団
0225	ARCHIVES 沖縄県公文書館だより　第56号	沖縄県文化振興会公文書管理課
0225	沖縄県公文書館ガイドブック2018	沖縄県文化振興会公文書管理課

（2）書籍関係（紀要・年報・目録・図録を含む）

受領月日	刊行物名	発行元
0306	非常時における文化財の救出と保全の手引き	ICCROM（文化財保存修復研究国際センター）

受領月日	刊行物名	発行元
0306	ユネスコ・チェア「文化遺産と危機管理」国際シンポジウム「日本と世界が共に目指す文化遺産防災」	立命館大学歴史都市防災研究所、国立文化財機構共催
0308	八王子・彩りの古代	八王子市
0308	新八王子市史編纂の記録	八王子市市史編纂室
0322	東京大学文書館紀要　第36号	東京大学文書館
0322	近代日本研究　34	慶応義塾福沢研究センター
0326	立教学院史研究　第15号	立教大学　立教学院史資料センター
0329	学院史料　Vol. 31	神戸女学院史料室
0329	東北大学史料館紀要　第13号	東北大学史料館
0404	大東文化大学史研究紀要　第2号	大東文化大学百年史編纂委員会
0404	北海道大学大学文書館年報　第13号	北海道大学大学文書館
0404	Annual Report 年報 2017/2018	九州大学
0406	武蔵学園史年報　第21号	武蔵学園記念室
0406	英語英文学研究所紀要　第43号	東北学院大学英語英文学研究所
0409	大学史紀要　第24号	明治大学史資料センター
0411	沖縄県公文書館研究紀要　第20号	沖縄県公文書館
0412	フェリス女学院150年史資料集　第5集 学校日誌に見る学院と生徒たち1924 ～ 1946	学校法人　フェリス女学院
0414	専修大学史紀要　第10号	専修大学　大学史料課
0414	明治学院歴史資料館資料集　第13集	明治学院歴史資料館
0414	明治学院歴史資料館資料集　第14集	明治学院歴史資料館
0418	東北学院史資料センター年報　Vol. 3	東北学院史資料センター年報編集委員会
0423	名古屋大学大学文書資料室紀要	名古屋大学大学文書資料室
0425	恒藤恭「商大学長時代日記/講演等レジュメ」1946.年.1947年	大阪市立大学大学史資料室
0502	早稲田大学史紀要　第49巻	早稲田大学大学史資料センター
0502	日本女子大学校規則(昭和2年12月～昭和6年7月)	日本女子大学成瀬記念館
0521	学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻研究年報　第7号	学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻

受領月日	刊行物名	発行元
0523	別冊Muse2016－2018特大号地場産業－伝統と革新の軌跡－	帝国データバンク史料館
0525	青山学院150年史編纂報告2高木壬太郎関係文書目録	青山学院150年史編纂委員会
0615	文化遺産防災国際シンポジウム　報告書	独）国立文化財機構　文化財防災ネットワーク推進室
0623	あゆみ　第71号　フェリス女学院資料室紀要	フェリス女学院資料室
0717	成瀬記念館　2018	日本女子大学成瀬記念館
0817	キリスト教史学　第72号	キリスト教史学会
0915	元興寺文化財研究所　研究報告書　2017	公財）元興寺文化財研究所
1012	市史せんだい　Vol. 28	仙台市博物館
1012	同志社同窓会125年のあゆみ－本部篇・支部篇－	同志社同窓会
1107	夢の力－歴史・仏教からの福祉へ－	淑徳大学アーカイブズ
1109	大阪市立大学史紀要　第11号	大阪市立大学大学史資料室
1210	2018年度企画展「戦没学生と文芸」図録	わだつみのこえ記念館
0110	渋沢研究　第31号	渋沢史料館

（3）受贈資料

受領月日	刊行物名	受贈者
0308	キリスト教文化　2017秋	小檜山ルイ様
0327	「北の歴史研究」とともに－年譜・著作目録－	菊池勇夫様
0417	東北学院の歴史	学校法人　東北学院様
0614	一筋の心　真弓政広先生を偲んで	嶋田順好様
0707	2017年度　宮城学院女子大学卒業アルバム	(株)東陽写場　後藤浩策様
1022	原阿佐緒文学アルバム	太田富美子様
1201	子供の時　戦争があった	佐々木孝子様
0111	日本基督教団　仙台北三番丁教会史　2007－2016	日本基督教団　北三番丁教会佐藤司郎様

資料室運営委員会

委員長	嶋田順好	(宮城学院学院長)
委員	田中弘志	(宮城学院理事)
	長井祥子	(宮城学院同窓会会長)
	栗原健	(宮城学院女子大学准教授)
	松本彰子	(宮城学院中学校・高等学校教諭)
	伊藤幸子	(宮城学院中学校・高等学校事務室主幹)
陪席	本田辰雄	(宮城学院事務局長)
資料室	佐藤亜紀	(宮城学院事務嘱託職員)

宮城学院資料室年報『信・望・愛』2018年度 第24号

2019(平成31)年3月31日発行

編　集　宮城学院資料室運営委員会/宮城学院資料室

発　行　学校法人宮城学院

〒981-8557

宮城県仙台市青葉区桜ヶ丘9-1-1

電話　022-279-1311(代表)

022-279-7765(資料室直通)

E-mail　shiryoshitsu@mgu.ac.jp

印　刷　株式会社　東誠社

〒983-0004　仙台市宮城野区岡田西町1-55

電話　022-287-3351

このPDFは、都合により一部掲載されていないページがあります。
完全版PDFご希望の場合は、資料室までお問合せください。